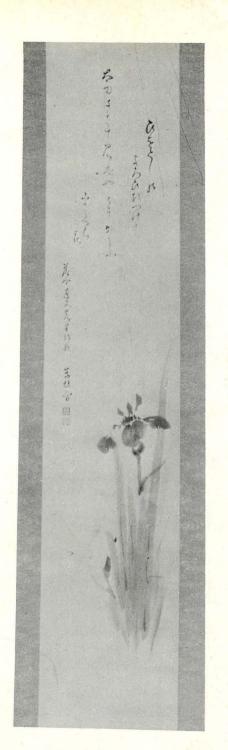


第 20 号







天人・まつきそおえん女史染筆



グラビヤ ―― ひをとしによろいをつけて太刀はきて――	根が現われ給う 高 木	- 人遺稿》 日本の情 (二) 西沢 西沢 東	一灯を提げて暗黒の巷をいく 高坂甚之紹介の辞 佐藤三聖明園講話会の記	――昭和四十八年三月二十四日「聖明園」にて―― 松 木 平 講話要旨	天の理――日本――	巻 頭 言――激動日本と価値の転換 松 木 アップ・あさ』第六巻 第二十号
	薫	嘉朗	之 三 助 蔵	天 村		天村
21 4	40	37	33 18	23	8	6

紫の光に逢うまで 自分で自分に驚く 修 つながるえにし 理 古 成

人 H 類 本 0)

道

市

野

光

鵬

58

光

末 和 竹 田 直 謙 69 76

西 横 沢 山 守 嘉 朗 孝 84 82

書 原高千代、加納如雷、 写真 太田修三、カット 小野義明表紙「牡丹」春光美術院 植田春甫画(52㎝×75㎝)松賴閣蔵

榊

原 美

作

豊 42 45

中

八 佐

> 木 村

隆

明

46

々木光

Щ

51

85

編

集

後

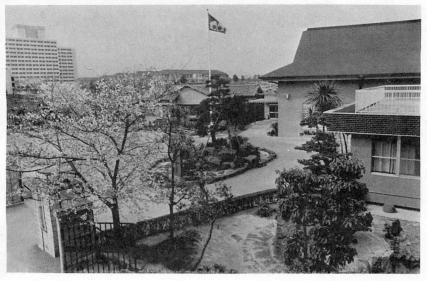
記

2

ち

お茶どころ菊川町

講演会報告



桜花爛漫の新しい道の場センター







ひをとしの よろひをつけて 太刀はきて 人力はきて





激動日本と価値の転換

正しき道のいかで絶ゆべき(松蔭)

皇神の誓ひおきたる国なれば

が、根を知ることであります。 揺れ動く日本の現状を見て、その表面の相にとらわれ、日本の國の真実を知っていなかったら我々は「まだ」 根とは、値(あたい)のことであります。目には見えないけれど底に蔵された真実の価値を知ること

らしい道)が連綿とつづくのであります。

皇神の誓ひおきたる國なればこそ、

″人類の根∜(天)が現われ、我々の ″根(みたま)〟が洗われ、そして ″正しき道〟 即ち ″天の条 (あた

人類の根、日本の根を明かす天人が現われいでましたのである。

らしい道」即ち天人女史以外にはなく、又なかったのであります。

「あたらしい道」は〝根〟を教え、育むところであります。〝根〟を知らしめるところは、この「あた

天人女史は我々に、人類の根、日本の根をお教えくださるのであります。

にとらわれることなく根をしっかり見つめなければならないと思うのであります。 激動の渦に巻きこまれてしまうことでありましょう。この期に、真実の自己をはっきりと摑んで、現象

根を知っていないのであります。根を知らないが故に、根無草のように右往左往しなければならないの であります。 自己の根、それは〝みたま〟の事であります。知性文明、物質文化にのみとらわれた現代人は自己の

れから日本人になった訳ではないのであります。日本人として生れて来たのであります。 我々は日本人であります。自分の意志で日本人になったのではないのであります。生れて、

これはどうしょうもないことであります。このどうしようもないことを因縁と云うのであります。だ

から我々は日本人でなくなる事は出来ないのであります。日本人が日本を否定することは自己を否定す

ることであります。

のみたま、その血、その肉体を変えることは出来ないのであります。 外国へ帰化すればいいじゃないか―と云う人があるとすれば、帰化は形であって、国籍は変ってもそ

親が先、國が先なのであります。その先を〝根〞というのであります。 自分より先に日本の國があるのであります。日本という國が自分より先なのであります。

國があるから自分らがあるのであります。根を立派にすることによって幹や枝葉が立派に繁るのであ

ŋ 日本という国が立派になってこそ日本人が倖せになるのであります。

値があるのであります。この価値の転換をはからなければ、 いのであります。この真実の、あたい(自己)、を教えるの「あたらしい道」なのであります。 現代人は価値を表面の第二次的なものに置いておりますが、真の価値はもう一つ奥の 人間はほんとうの゛あたい 根 、にこそ価

自分より、

この稿は、

昭和

四

+ 八

日

本の国に

つい

こういう道があるから おうく 何となく

もう一遍 元に還えるだろ これが本当です 日本の国は おうくもうく

そこの方に

何かがあるから

どうやく

0

そこだく そこがあるんだ

こういう道によって あらくへく

天人女史の御垂示の抜すいであります。 ての部分を集めました。 年二月 日 か ら 三月三日までの紫の間 13 おけ る、

二月二日金

理というものは 天からの賜りもの

その理をどうです おんなじように 受けましょうえ(同じ) けちくさく 軽すぎる しにくいです それでは話にならん こうゆっている

そらくくくく ほうく さあ分るでしょう 理やで 理というものは ほらく~く~く

世界中に 理はないなあ さあ分るでしょう 日本だけが 理じゃーえ そうですく

俺は日本人だ 日本人だから 理でござる

理の王

こう申します

0

めちゃく じや どうやあ

0

天上から 見苦しいな 醜いな 今の日本 そういうふうに おうく 云われている

0

O

二月七日休

二月十二日月

お前さんら おうく 日本という国を

あらく いただくんですよ いただく気持で 水気たっぷり おいく おいくくく うおー

0

0

もうお分りでしょうな この道だけじゃ この道だけが どうですく そういうふうに もうお分りですね この道〈〜 この道だけが この道あるから 国が助かる

手を取り合って あらくくく おうく

喜んで~~ 自分も人さんも あらまあ

仲睦じく 何とまあ 日本人 日本の国

こう云っている これどうです

何となく みんなさんの 思いの方に ほうらあ

二月十六日金

10 -

何となく 今を頑張る おい~~ こんな時代じゃこの道がな しにくい~~ こんな時代じゃ

今を頑張りゃ 分るだろう

今の時代を みんなさんは

嫌とは云えんのえ おうくへ そうだくく嫌じゃくく 嫌でたまらん でもな

いいところを お互い同志が 出し合おうえとにもかくにも 道のお方は あいくへで

0

0

日本という国は そのうちにこの道のお方が 真清水をまくから

徐々に だんく 成りかわる

それが本当だ

お前さんら おうくく これが理です 誰が ゆっているのかなあ どこでゆっているんだろう 天上で そう云うている おうくく もうお分りでしょうな こうゆうふうに云っている

二月十七日出

0

0

それならば もう分った ほらくくく それでいいんです 自分とは別に お他人さんを おうく〜 これだけをな 本気の本気で さあく〜 お前さんら お行によって もう暫くで 自分というものを でかすだろう 自分は平気じゃ さあ 分った

日本は危いわな さあ分った 成程 自分達だけが とくしてもな それでは

O

あたらしい道が もう これだけで みんなさんは 国替えの理を 云うところ

国じゃく おうく 国が大事です

国が大事です お分りなさいや ほらくへく

それを知っているらしい

この道はなあ おうく 天の理

天の理は 日本人には 当然のことです お分りなさいや これだけを よくく 納得してや おうく

天の理じゃ 日本人なら おうくく あらくく

ほうく

二月二十一日份

おいく おいく~く もうお分りなさいやあらまあ ありがたいく その筈です

日本人でしょう 分ったら どう

0

0

みそぎそぐ理が 新しいんです まあく こういうところなんです この道のお方 どうやく〜 身をそぐところ これを知りましょうえ 天は云うで

自分に甘くて 自分だけよかった そういうお方では あらまあ 日本本来 それとは違うで

そう云われるわな

お前さんらは 日本ですねえ

何かにつけて 何かの都度 成程そうだな それいいんだな そこが違っている そこのところ 日本という国は ほらくくく ほうく

これこ口っころうぎょよう まうこうこく 何でもかんでも 自問自答 そういうならわし

そういうふうに

お前さんらは 成程~~ こういう道でそれを知っているでしょう ほら~~~~

二月二十七日火

– 13 –

根っから葉っから 自分で自分を 見直す筈です

これが分ったら たいしたもんです

日本 日本 日本よいとこ こう云っている

日本は ほうく 根の国です

これで よかろう

もう これだけで こういう国に

生れさせられた

われくしは

幸せものじゃ

0

天知る 地知る 我ぞ知る

そういう言葉は 知っている筈じゃ それならば みんなは あゝそうだ そういう言葉を ご存知ないかな さあく

自分に嘘をつかない よしくく それでよかろう

何にもこわくないで 要するに 自分です 自分だけじゃ

あらまあ

分るだろう おうおう

自分だけが 何もかも ありがたいんだったなあ ああ そうだった 要するに 自分だく 要するに それですわな

そうだく もう分った

三月一日休

ですから 難しいこともない 当り前なんです

O 0

この道によって どうやら 大自然

どし (さあ分りましょうえ 大自然の理が これからです

国が危い (これだけです 大自然の理は 如何でしょうな どうくくく

自分だけが 自分だけで どうなるものか さあお分りでしょうな お前さんら 何と悟る

要するに 国がく 国があってやで さあく~~~~ それを知っているだろう

国には あらまあ 自分だけではない

この道によって あらまあ 教えこまれているんえ そうだ~~ 国柄といい 国の理 あれもこれも

そういうお方の方が 多かったんえ にもかかわらず 自分だけで 自分だけが

三月二日金

まあく もうお分りでしょう

国じゃく 国が先です

おいく おいく もうお分りでしょうな ですから 自然は あれやら これやら お見せ下さ

っているんえ それをどう取る

そうして 今からはな 日本の国は どう (どうしょうえ

お前さんら とにかく

われく 人間は 心であった 心がしにくい 心が仇です

この道を知って 心は余分 それが分った

あらまあ

大自然は どうくくく どうく

国が危いにジャーニう申しておる日本人よ「日本人よ」日本人よ「おうしく」国が危いんじゃ

国が危いんじゃ こう申しておる

自分達には どうく~く 子供らがあるだろう

大人の世界を やり替えにや どうもならん

大人の世界を 大人の世界が

分るだろう

三月三日出

(テープレコードより抄録



益々意気熾んな



松木天村先生を紹介する佐藤三蔵先生(中央)

ます。

紹介の 正月になってから初めてお目にかかる佐藤三蔵 辞 皆さん、今日は。(拍手

理事長でございます。

しまして、楽しく嬉しく涙が出るようでございます。

只今、皆さんと共に見事な演奏と合唱をおきき致

聖 昭

明

園

講

話

会

和四十八年一月二十四日

佐

藤

蔵

ようにお考えになったらよいと思います。 れども青年のように若いお方をお一人ご案内して参 ならないで、年を一つ取った、若くなったと、 今日はその意味で、お年寄の仲間でございますけ この かかれることは何よりも嬉しいことでございます。

正月が来たので、

また一つ年が増えたとお思いに

たりしております。

こうして元気な皆さんとお目に

ので、咳が出たり、熱が出たり、消化不良をおこし

を見て本当に嬉しく思います。風邪が流行っており 風邪にもめげないで、こんなに元気な皆さんのお姿

台湾から来た風邪でございます。たちが悪い

りました。

にはかみながらの道、すなわち日本の道というもの

八十二才になられます松木天村先生でございます。八十二才になられます松木天村先生でございます。非常に景色のよい、山紫水明の地でございます。そこで先生は、よーし、一つ東京に出て龍馬に負けない仕事をしょうというので、若い頃、青雲の志止みがたしというところで一所懸命に勉強されました。ところが、やっとこれからというところで、あの関東大震災に遇われまして、命からがら、丸裸あの関東大震災に遇われまして、命からがら、丸裸あの関東大震災に遇われまして、命からがら、丸裸あの関東大震災に遇われまして、命からがら、丸裸あの関東大震災に遇われまして、命からがら、丸裸あの関東大震災に遇われまして、命からがら、丸裸あの関東大震災に遇われまして、命からがら、丸裸あの関東大震災に遇われまして、命からがら、丸裸あの関東大震災に遇われまして、命からがら、丸裸あの関東大震災に遇われまして、

のであります。 のであります。

が良くならなければならない。それには昔から日本がりた還って更に世界で活濯するには、一人一人の日本人で大地が、世界的にも国内的にも色んな難問題がある時に、ししたが、世界的にも国内的にも色んな難問題がある時に、ししたが、世界的にも国内的にも色んな難問題がある時に、ししたが、

そこで八十二才におなりになる松木先生、やっぱりそこで八十二才におなりになる松木先生、やっぱりをは沢山白くなっておりますけれど、最近だん/〜髪は沢山白くなっておりますけれど、最近だん/〜を然曲っておりません。階段なんかもポケットに手を全然曲っておりません。階段なんかもポケットに手を全然曲っておりません。階段なんかもポケットに手をつこんでどんどん昇られるのですからしたものです。

下さいました。私もだん~~その生き方を習おうと下さいました。私もだん~~その生き方を習おうとでも引っぱったりすると、何か心にわだかまりが足を引っぱったりすると、何か心にわだかまりが足を引っぱったりすると、何か心にわだかまりが足を引っぱったりすると、何か心にわだかまりが足を引っぱったりないことだ」と仰るのであります。

と、はじめてシャツを脱いで計られたのです。すると、はじめてシャツを脱いで下さい」と申しましたら、「そうかな」とかったっです。これには私、驚きました。「先生、など計ったことがない、病気をしたことがないから」と仰ってシャツの上から体温計をはさんで平気でいるでしゃるんです。これには私、驚きました。「先生、らっしゃるんです。これには私、驚きました。「先生、らっしゃるんです。これには私、驚きました。「先生、らっしゃるんです。これには私、驚きました。「先生、らっしゃるんです。これには私、驚きました。「先生、と仰ってシャツを脱いで計られたのです。新幹線でしているわけであります。

病的な熱がないのです。と三十六度五分という日本人の平均体温です。4

まあ年をとると血圧が高くなるから血圧を計ってみようと思いまして、血圧を計ってまた驚いた。 普通一七〇位あればもういいんですが、まだ若い、 らっしゃるんです。年をとると腎臓が悪くなったり、 らっしゃるんです。年をとると腎臓が悪くなったり、 らっしゃるんです。年をとると腎臓が悪くなったり、 に出したいような素晴しくいい小便なのです。蛋白 もなければ糖もない。まあ然し、お年ですから心電 図で心臓を診てみましょうと思いまして、心電図で 割ってみますと、これまた展覧会 さなければ糖もない。まあ然し、お年ですから心電 図で心臓を診てみましょうと思いまして、心電図で 対ってみますと、これまた立派なんです。ちょうど、 、ザ・イレバーズ、の演奏のように非常によく調和 のとれたいい心臓なのであります。

一灯を提げて東奔西走の天村先生を



↑ 2 月21日 東長岡ロータリーにて



↑ 2月20日長岡ロータリーにて ↓ 2月24日 花束を受けられる天村先生

← 2 月24日四日市市民会館にて 右から、岩野見斉四日市市長 迫水久常先生、松木天村先生



四日市市民会館にて



↑ 2月17日 板橋商連会館にて



田無市長 市長



↓ 3月4日八日市夕食会





↑2月18日 バリツクホテルにて 道友の集い



↑2月16日 狭山RC 埼玉銀行 入間川支店にて



↑名古屋観光ホテルにて



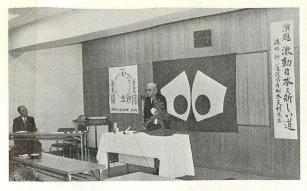
↑ 八日市浜野会館にて



↑ 3月2日小田原青年会議所 湯河原商工会議所にて



↑3月2日 湯河原 ロータリー 天野屋旅館にて



↑ 3月26日関西協力会 大阪商工会議所にて



↑ 3月17日川口市川口信用金庫にて



↑3月15日横浜東急ホテルにて 横浜西・神奈川合同LC例会 左から天村先生、佐藤先生、 和田先生、迫水先生

←3月15日 横浜西、神奈川 合同LCスピーチ

Liberty Intelligence (L) Our Nations Safety



LIONS CLUB

SAYA TATBUDA

THE WAR THE PARTY OF THE PARTY

↑佐屋立田

ライオンズ







↑日光LC十周年記念大会 302 E 7 地区ガバナー榎氏らと



3月16日冨士銀行本店にて 金子相談役、前頭取(右)と

←池袋RC道友榊原氏(右)と 池袋三越支店にて



↑池袋ロータリー



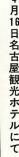
↑ 3月22日 明石セントラ ルLC 姫路信用金庫にて

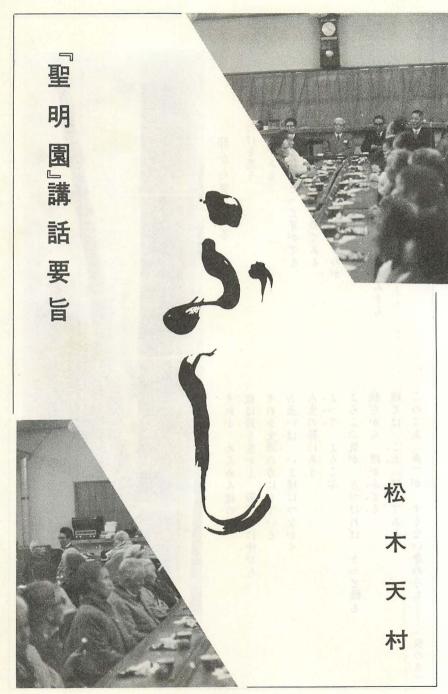
←4月7日 東大阪アポロLC レストラン アサダにて



↑3月28日 桜井市座談会 竜吟荘にて

← 3 月25日 西宮健康法集会 十三商工会館にて





貫く性が身に強い

たけを思う

その節ごとに きっと芽がでる

あたらしい道が

いま節である

竹とは節がある

節から芽が出る

押しとは どうしてもせねばならんから それを みごとに切りかえるのが 理とは 秋だから 理がふとるよろこぶ気が きつければ

押しである

それが 親は節を生かし 節ごとに伸びた めんめん親の理

よって よろこぶ 人生の節にあう

きっと稔る

お互いは いま場につながり それを生涯の力にしている

こゑ (肥) である

このこゑ (声)が すくない身のうち…… (教の泉)

のであります。私はそういうふうに聴かせて頂き、有難く思いました。 とは違うところがあるように感じました。それは、皆さんから出る音が全く汚れていないということな 只今、皆さんの器楽合奏とコーラスを、目をつむって聞せていただいたのですが、なにか世間の方の

それに本間先生 (註 聖明園々長) を中心に、目のご不自由な方々がこのような美しい音楽を演奏なさ

るのに、一方、世間一般の目あきの社会を見ますと私は暗然たる思いがするのであります。 今の世間は明治時代に比べたら、見るもの聞くもの、まったくひどい世の中で、私なども見るに耐え

ず、早く死にたいなあと思うこともあります。それ程ひどい世の中になってしまっております。新聞・ 雑誌・ラジオ・テレビに載るものは、まさに殺人だらけという悪世であります。

そんな世の中で、こうして本間園長先生を中心にしてご老人が集って生活しておられる姿は、私は本

当に地上の楽園-天国-ではないかという感じがしてなりません。

て目あきよりお倖せかも知れません。 の中になってまいりますと、目が不自由だからいやなものを見ずにすむから、そういう意味ではかえっ あるということはその人生において言葉にはならない苦がおありになったと思います。でもこうした世 こういう表現はあるいは失礼かも知れませんが、皆さんは目が不自由でいらっしやる。目が不自由で

私たちの「あたらしい道」では「苦を喜ぶ」ということを教わっております。苦しいことも、その思

ことでも、なんでもいいふうに受けとって喜ぶことが大事なのであります。これを「節から芽が出る」 い方によれば喜べるのであります。身の不幸を歎くだけがのうではありません。苦しいことでもつらい

というのであります。 「節」というのは、まがり角であり、接点であり、句切りであります。要するに「大時な時点」を人

生の節といい、その「節」の受けとり方、通り方によってそこから腐ったり、芽が出たりするのであり 苦を喜ぶか、あるいは投げやりになるかによってその人の人生は大きく変るのであります。「節」と

「節」とがうまく合わないのを「不仕合せ」というのであります。

の声の「節」とを合せるからコーラスになるのであり、合っているから聞いていて、唄っていて楽しく よるのであります。 先程皆さんのコーラスを聴せてもらいました。コーラスにも「節」があります。音楽の「節」と自分 「節」の合せかたによって、不倖になったり、倖せになったりするのであります。その合せ方は心に。

美しいのであります。 人間にはそれぞれ個性があります。その個性が「節」であります。それでお互いがお互いにその「節」

を合せることによって人間関係というか、団体生活がうまくいくのであります。

きてこないのであります。 又、大自然にも「節」はあります。大自然の「節」に人類の「節」が合えば公害などというものは起 人間にとって「苦」というものは、自然が示してくれる警告なのであり、大切な時点なのであります。

決まるのであります。 だからその「点」をうまく「節合せ」することによって、即ち喜ぶかどうかによって、その人の運命は

ためには、まず「気を立てる」ことであります。 それでは、どうしたら苦を喜べるようになるかであります。肚をつくることであります。肚をつくる

気

げ、楽隠居の年であります。私も本来は隠居したい気持なんであります。然し、先程申しましたとうり、 この「なんとかしなければ」という気が大事なのです。皆さんも諦らめずに頑張っていただきたいと思 この世の中を見ておりますと、全く、何とも云えない悲しみを感じます。そこで何とか、ひとつ生きぬ いて明治時代の日本精神をとりもどし、本来の日本にしなければと思って 頑張っているのであります。 皆さんの平均年令が七十二才だということでございますが、もう人生といたしましてはすべて成しと

本のめどうがつきましたら、私の使命は終ると思います。これが私のすべてであります。 ばと――そのうちに日本はなんとかめどうがつくんではないかと思っております。世の中が変って、日 私は、明治二十五年の生れで今年八十二才であります。元気にあと十年は第一線に立って働かなけれ うのであります。

私は唯、日本の国を良くしたいと思ってやっているだけであります。日本の国を良くするには一人々々

がこれなりことなることがります。

が立派な日本人になることであります。

でありながら、日本を否定したりする人がありますが、これなどはまったくお話しにならないことであ 生まれてから日本人になったのではないのです。日本人として生まれたのであることを知る必要があ 立派な日本人であることは、まず自分が日本人であることの自覚の上に立つことであります。日本人

う事実は、どう騒いでもどうにもならないのであります。これは否定しょうにも否定出来ないものなの 「立派な国ならば愛そう」、「立派な親ならば孝行しょう」――などという観念ぐらいでは否定でき

るであります。父の子として生れたということはこれどうしようもないことなのであります。父から子へ

と連鎖するもの、これを「父子」というのであります。日本という国があり、日本人として生まれたとい

い血が脈々と流れているのであります。「血」が「気」になるのであります。 もし「血」を否定するならば、それは自己破滅以外にはないのであります。「血」が「気を燃やして」、

自己を生かすのであります。

なってこそ、日本人一人一人は倖せになるのであります。 『国を、国をなんとかして……」と一人一人の日本人が気を燃やしてこそ、国は良くなり、国が良く

分の欲というものはありません。だから私は健康なんだろうと思っております。 であると思っておりますし、これを実行することに生き甲斐を感じているのであります。これ以外に自 こういう意味に於いて、私は今働らかせて頂いておるのであります。これが私に課せられた天の使命

る人にも苦労があるということであります。その苦をのり越えていく事が人生なのであります。 もう一つ大事なことは、人生というものは生れてから死ぬまで矛盾だらけであり、誰れもが、如何な

が多いのであります。肚がまえが大事であります。それを、苦をいやがるから、苦はます~~苦が苦に す。避けられないものなのですから、肚を構えてこちらからぶつかってゆけば、それ程のこともない事 だからその苦から逃げよう逃げようとしてはだめであります。逃げるから追いかけられるのでありま

なるのであります。 「不思」であります。「苦」は思えば思うほど大きくなるものであります。思わず、考えずにぶつかる

ことが大事なのであります。

り一層苦が増し、果にはノイローゼになってしまうのであります。自己逃避が現代病の最たるものであ 現代人は知慧にのみたよりすぎております。だから苦を避けようとして一層頭を使います。だからよ

やく、若い時分からの念願であった日本の国のために働ける時期が到来したのであります。 私も八十才の今日まで、盤根錯節といいますか、苦労の多い人生を生きて参いりました。そしてよう

組んだ節」という意味であります。そこから、非常に入り組んだ苦労の多い人生の形容、あるいは解決 「盤根錯節」という事は中国の後漢書という本の中にある言葉でありまして、「わだかまった根と入り

困難なこみ入った事柄の意味に使用するのであります。

盤根錯節、これ人生の華と申します。

あり平坦な道があるように見えます。然しそれは観念的なものでありまして、事実は、その瞬間その瞬 苦労の多い人生を送った結果、花が咲くのではありません。盤根錯節の人生そのものが花なのであり 人生というものは、五十年なり六十年なりの時間の流れとして考えた時、苦があり楽があり、坂道が

間しかないのであります。「今」しかないのであります。 眺めているときに「苦」だ「楽」だと見えるのであって、思い切ってぶつかってみるならばそれは

苦でも楽でもないものなのであります。 眺めているときに「苦」だ「楽」だと見えるのであっ

て過去を振りかえったときの感じでありまして、その時その時は唯一所懸命通って来ただけであります。 私の場合も今日あるということは過去の八十年の苦難の多い人生でありました。然しそれはこうやっ

芽

により、即ち、苦を喜ぶことにより、根即ち「みたま」が肥えて、それから芽が出てくるのであります。 なく、人生の苦労困難の節を拝むことでもあるのです。節が即ち種であります。節という種を拝むこと 種からすぐ芽が出るのではなく、種から根が出て、それから芽が出るのであります。 「ふしおがむ」という言葉があります。ふしおがむという事は、神仏を伏し拝むということだけでは

竹がそうであります。

云ったりして逃げ腰になるのが多いのです。だから折角の「節」から芽が出ずに、その「節」から腐っ ところが多くの人は、その苦労困難に出合うと畏縮してしまうのであります。苦を苦にして泣きごとを

ていくのであります。

が出来てくるのであります。植物でも目に見えないところにある根が立派になれば、当然枝や葉も立派 ことが大事なのであります。苦を喜ぶことによって身のうち(みたま)がどんどんふとるのであり、肚 重なり合っております。これが拝み合いであり、ふしが合っている姿であります。人は自分の苦を喜ぶ 竹は節によって伸び、節が多いから折れないのであります。竹を半分に割ってみますと、節は上下か

中で失明された方もありましょう。いずれにしても、人生の最も大きな節だと思います。その節を拝む ここにおいでのお方は皆さん目が不自由のようであります。生れながらにそうである方も、人生の途

ことによって本当の自分(みのうち)が立派になるのであります。

生まれて来たのです。みたまがあるから生きているのであります。 目に見える表側の自分ではなく、内なる魂が本当の自分なのであります。その「みたま」があるから

はございません。唯、心が問題なのであります。 みたまというものは外界の状態によって、如何なる事情があっても、傷ついたり汚れたりするもので

たりしているのであります。埃を積んでいるのです。 世間の人々はみんな自分の欲のために、心によって、その思い方によって自分の魂を曇らしたり汚し

とに人生の意義があるのであります。 ん。すべての人々が自分の身の内に持っている本当の自分、即ちみたまを磨き、みたまを立派にするこ 人生において、地位とか名誉とか、財産とか学問とかいうものに本当の価値があるのではございませ

皆さん方は、欲はもうおありにならないと思います。又失明という人生の大きな節をのりこえて今日

まで生きてこられました。そのことによって身の内が磨かれ、立派になっていると思います。 だから、先程聴かせて頂いたコーラスが、何かしら他の人々のコーラスとは違った響があるように感

じられたのだと思います。

そして肉体生活を終え、磨かれた「魂」は天へ遷るのでありますから、洵にお芽出たいことなのであります。 般の人は「お気毒だ」とか「ご不自由だろう」とか思うでしょうが、私はそうは思いません。 このように私は受け取りまして、社会と隔絶したこういうところにいらっしゃる皆様のことを、 本間園長を中心に、こうして節を拝んでいらっしゃることは実に素晴しいことだと思うのであります。 世間

んに、先程のお礼のため「よさこい節」をひとつ歌わせて頂きます。 最後に、人生に節があるように、歌にも節があります。私は土佐の高知の出身でありますから、皆さ

(テープレコードより抄)

松木先生は最後に、「土佐はよいとこ(黒潮うけて、春をまたずに(花が咲く」という自作の「よさこい節」を元気 にうたわれ、万来の拍子の中に講話を終えられた。

伊藤)

文責

ただー 一灯を頼め(佐藤一斉「言志晩録」

暗夜憂うることなかれ

灯を提げて暗夜を行く



盲老人ホーム「聖明園」訪問の記

天村先生

高 坂 甚 之 助

蒼空澄みて緑濃き **青梅の里にそびえ立つ**

秩父連峰を遠く望み、富士の霊峰を南

常緑樹と四季おりおりの花に恵まれ、小 に、清浄な空気に包まれる楽園がある。 西に仰ぐ多摩公園の青梅市の郊外の台地

福祉施設である。こゝに最高九十五才、 自然環境に囲まれたところである。 その名は「聖明園」、盲老人のための

鳥の囀りを耳にすることが出来る豊かな

現園長である本間昭雄氏を中心に生活し 平均七十四才の目の不自由なご老人(男 ておられる。 女合せて百五十六人)が、創設者であり

の家」である。 多くの善意ある人々につつまれた「愛

香をとめん人にこそ待て山里の 垣根の梅の散らぬかぎりは(山家集)

香を待つ人々のもとへ、松木天村先生

のは、昭和四十八年正月の二十四日であ った。梅が蕾をふいていた。 が「理」という一灯を提げて訪ねられた この日、国立のロータリークラブの例

汚染された空気に満ち、自動車の洪水で 青梅街道に向けられた。街道はまさに、 事長である佐藤三蔵博士のご案内で車を

よる。

会に出席された先生は、「聖明園」の理

あった。 「暗夜憂うることなかれ、ただ一灯を

りまわられている。 人々の心に希望の灯をともさんとして走 頼め」即ちこの国に「あたらしい道」が あると、「天人女史」を頼めと、先生は

香黄の闇手さぐりつ

知らさんと。

失明された人々の胸に、月のあかりを

幸を求めてたどり来し

にして失明という苦難に遭い、一時は世

「聖明園」設立の動機は、学業の中途

た本間昭雄氏が、その懊悩を克服、心機 の光とともに人生への希望をも失しなっ 転して魂の眼を開かれ、自己の運命と

同じくする世の多くの人たちのためにそ の生涯をさゝげたいと決意されたことに

を訪問して、更生相談、点字指導など心

以来、本間氏は、失明者の家庭や病床

回するうちに、恵まれない盲老人の数多 と心を結ぶホームティーチャーとして巡 いことを知り、これら薄幸な人々の老後

得は、学校や団体を回っての鉛筆の一本 ホームの建設に当っての多額の資金獲 ホームの建設を思いた、れたのである。 を明るく豊かにすることを念じ、盲老人

くの人々の暖かい協力によって成ったの 妻の若い情熱と根性に深い理解をもつ多 売りから始められ、東奔西走する本間夫

先生は、この聖明園の元後援会長であり である。 である。開園は昭和三十九年三月のこと 松木天村先生と交遊のあった佐藤尚武

されることになったのである。 ということも耳にされ、天村先生は 先生の御令妹がこの園に入っておられる 常先生が引きつがれた。 の道友でもある参議院議員の迫水久 現在の後援会長は そして佐藤尚武 あたらし 訪問

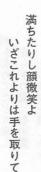
何となく軒なつかしき梅ゆゑに 住 みけん人の心をぞしる 山家集

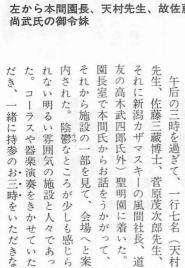
令人口 らがしのばれる。 老人が数多くなった。 あるいは断絶などの影響を強く受ける盲 増しつ、あり、 園の目標などをうかがっ 聖明 明 るく静かな環境に、 妻を持って敬老の二字にふさわし ショックより一日も早く脱却 0) 園の目的とするものは、 増加と共に高令時の失明者が急 特に失明の故に核家族化 その本間氏 この薄幸な人々に、 本間園 た。 か 1.6 近年、 長の人が 聖 明

を目 的としてい

合唱、 され 楽を通じて情操を深め、 望と喜びを与え人間関係 裁縫など十八種のグループがあり、 心に行われている。 高めるよう計画されたグルー 心身の機能減退防止のため、 自主的な活動が 入園者の生活指導は、 ている。 短歌、 俳句、 職員と共に楽し 現在は、 JII 柳、 相 老後の生活に希 の調和をはかり、 小 互の信頼性を 点字、 唄、 プ活動を中 又趣味と娯 詩吟、 器楽、 日 展 K 開

> には、 ざしている。 して、円満な家庭の延長となることを目 離されることなく、 異体同心の関係のもとに一般社会から隔 クによって、 食事の献立と調理、 又、 疾病 園長以下各専門職員のチー の予防、 盲老人の眼や手足となり、 社会の一つの営みと 非常災害時の対策等 療等の健 4 ワー





楽しい平和な老後を過ごしてもらうこと

い敬愛される老人になると共に、

明るく

故佐藤

がら、 話要旨別掲 天村先生のご講話を聞い た 一講

意味するのである。その故

にか皇室関

書の「礼楽志」にあり「天子の明徳」を に、ザ・イレバーズ、と呼んでいる。 ておられたとか。このグループをちなみ に佐藤尚武先生の妹さんが三味線をひい 名を「聖明園」と称し、この言葉は宗 後できけば、器楽合奏のグループの中

は、 庭には御手植の梅の木などもあった。 妃殿下、常陸宮殿下などもご来園になり、 ている。ちなみに秩父宮妃殿下、皇太子 の方々からも暖い意をこの園はいただい 聖明園の弥栄を祈って帰路についたの

暗夜を憂うることなかれ。 冬の日の早い昏黄の闇の中であった。

感謝状 松木天村殿

なたは常日頃在会事

木 天 村殿 状

赤と表します かなかとされましたのでここに裏 がなかとされましたのでここに裏 がんとう 常に深い理解を寄せら 斯和四十八年一月三十四日 全国百五人指在施設 獨長 本問路雄 会长 杜蘇三蔵 **连然抗烈企**

しんから感謝の意と表し

郑和中八年一月三日 官差人十二世界問該教会

聖明國明長本問罪班全長 追水久常

ム聖明園に多期のご寄付 よってここにその美挙に対

といってこのたび言え人ホー 福在に深いご理解と爱情 心をよせられことい言意人の あなたは日頃在全事業に関

をされました

園 0

蒼空澄みて緑濃き 青梅の里にそびえ立つ 心のいこい恵む家 その名も清し わがあこがれの愛の家 聖明園

昏黄の闇手さぐりつ 幸を求めてたどり来し 安らぎの園 心をこめて歌はまし その歓びを嬉しさを 聖明園

集い寄添う友と友 満ちたりし顔 聖明園の弥栄を いざこれよりは手を取りて 共に祈らん弥栄を 微笑よ



長じて史書を読むにしたがい、平氏の中にも平重盛という ような尊敬すべき人物があることを知り、救われたような か、私は平氏よりも源氏の方が少年の頃から好きでした。 とはまだ印象に残されていることでしょう。どういうわけ テレビで「新平家物語」が放映され、この平家一族のこ

族の中で、尊敬するに足る者は平重盛でしょう。平清盛も 点がおかれます。そんな習癖が私にはあるのです。平氏一 みなさまと共に考究してみましょう。 まり好きになれないのです。さてそれでは平重盛について 非常な才幹のあった人物に相違ありますまい。でも私はあ して、どんな態度をとったかというところに先ず第一の重 私は歴史上の人物を評価するのに、その人が天皇さまに対

平重盛は清盛の長子なり。資性忠謹温厚にして武勇人に

気がしたものでした。

めしむ。重盛止むを得ずして父と共に春日門に向ふ。既に すぐ。久安元年(西暦一一四五年)蔵人となり従五位下に 独り軽騎を麾いて進む。清盛遽で、左右に命じてこれを遏 攻む。源為朝西門を守る。わが先鋒の二将その射殺す所と 叙せらる。保元元年(一一五六年)清盛に従いて白河殿を て曰く「勅を奉じて軍を出す。何ぞ敵の強弱を問わん」と なる。清盛惶懼して(おそれて)引退かんとす。重盛奮い 西 沢 嘉 朗

たま () 源氏の大兵安倍野に要する (さえぎる) と聞き、 て、安んぞ速かに国難に赴かざらんや」。衆皆これに随ふ。 重盛曰く「身は武臣なり、天子逆徒に迫られたまふを聞き りて藤原信頼等反すと聞く。清盛進退を決する能わず。 平治元年(一一五九)清盛に従て態野に往く。切部に至 して白河殿階つ。二年正五位に叙せられ左衛門佐兼遠江守

に任ぜられる。

とす。 to 衆寡敵せざるを恐れ先づ四国に渡り兵を徴して後に ゆっくりすれば) せ て京師に還る。 耻る所なし。今日 重盛日く「 彼れ我に先たん。我今寡兵を以て敗る、 機失うべからず、 の事 死あるのみ」と。清盛意を決 若し稽緩せば 考えて 戦 われん ししいい

天皇及び皇后を六

波羅

0 自邸

12 迎へ

奉

り、 義朝等を撃てこれを走らし、 且つ戦ひ且つ走り源氏の兵を誘うて宮を出さしめ、ついに 兆を示す所、 < 勢甚だ熾んなるを見て沮む色あ すでにして清盛、 御白河法皇平氏の専横を憎みたまい藤原成親等とこれを 「年号は平治、 重盛等をして兵を分ち信頼を攻めしむ。 戦勝必せり。」と、 土地は平安、 宮城を回復することを得たり。 依て進みて大に戦ふ。 no 我は平氏なり。これ天の吉 重盛士卒を勵まして日 衆、源氏の兵 重盛

ぞ甲を被らざる」と。 垂なるを見、 しき)に集まる。 奉んと欲し大に子弟族黨を召す。皆甲を穿ちて清盛の第(や 滅さんと謀らせたまう。 袖を引きて曰く「大事あり、 而して重盛後れて至る。 重盛叱して曰く「汝等何故に甲を被 事顕わる。 清盛怒りて法皇を幽し 宗盛その鳥帽直 公を召す、 公何

すにあらざれば甲を被らざるなり」と。清盛これを見て俄

敵兵何処に在る。

我は大臣大将

たり。

寇賊

0 朝

廷

を侵

を以て屢ば襟を正す。重盛入てこれを苦諫し泣て曰く「伏

て尊容を視るに家門己に衰運に近きを知る。

そもそも我

かに素絹を着し以て自

から掩う。

襟開

き甲露わる。乃ち手

る、人尚ほ以て過奨となす。大人は小官より起って位人臣 過ぎず、 家は桓武葛原の裔といえども下って人臣となり、 を極め、 にして顕われず。平将軍 不肖重盛の如きも尚ほ大臣大将を辱うし、 刑部卿得長寿院を造るに及びて始めて昇殿 平貞盛) の功を以てすら国 中ごろ微 を許さ 門朝

罪すべきはこれを罪せば何ぞ至尊に及ぼし奉るべ の滅亡日なからん。 重盛深く懼る。今一二の首謀を捕へ、 王事を以て家事を辞 けんや。

或は隆恩を忘れて皇威を軽蔑せば鬼神必らず怒らん。一門

廷に繁栄し、田園天下に半す。皇家の寵恩極まれ

no

王事を辞せずと、況んや善悪明かなるものをや。重盛六位よ 重盛またこれを聞く。 家事を以て

り三公に上り、

進退爰に谷る。生きてこの憂いを見る、 んとすれば忠ならず、忠ならんとすれ 大逆不道に陷る。 ず重盛のために死をいたさん。保元の乱に源義朝父を斬 盛入て禁中を守護せざるを得ず、 ち嚮背の決自から在るあり。假令大人強いて闕に 今我も亦これを免れざる乎。 平素撫する所の士亦必ら ば孝ならず。

且つ言い且つ泣く。滿座感動せり。清盛色沮み起て内に入 大人願くば先づ重盛の首を刎て後その志を行うべし」と。 死するに如かず。 鳴呼孝なら 向うも重

これを諫止せずして却て事を賛成するや」と。 重盛出でて諸弟を責て曰く「大人は老耄せり、 又将士に告 卿等 何ぞ

君恩に沐浴すること勝て数うべからず。乃

蓋し重盛権謀を以て父を威し其過を救わんとしたるなり。 うて之に赴く。集る者二万人、西八條の第また一人なし。 と。直に小松の第に皈る。心猶ほ安んぜず、夜急に令を出 げて曰く「父に随て闕に向うものは重盛の首隕るを俟て」 と。清盛強ゆる能わず。而して重盛の疾日に重し。高倉天 か為さん、且つ外朝の医に頼らば国体を辱しむるを奈何せん を得。たま (〜宋より来朝せる医あり、清盛その治療を受 泣して措かず、旣にして熊野に詣り自ら死を祈る。遂に疾 す。真に忠臣なり」と、仍て感泣したまうこと久し。 を唱ふるのみ。重盛出で将士を労し謝してこれを罷め去ら 清盛果して大に惶れ為す所を知らず、念珠を手にして仏名 く「沈重の人斯の如き令を出す、必らず故あらん」と。争 して曰く「大事あり、速かに来り会せよ」と。衆相謂て曰 月(一一七九年)竟に薨ず。年四十二。 皇為めに御薬を賜い法皇また親臨させたまう。治承三年三 けんことを勧む。重盛辞して曰く「命は天のみ、治療何を しむ。法皇聞召して宣わく、「重盛怨に酬ゆるに徳を以て 清盛の跋扈日に甚し。重盛一夕清盛の誅せらる、を夢み悲 この重盛の苦衷を想うがい、。至孝にして至忠。父の不 みの論語知らず」と云うべきでしょう。 歴史書を読んで、今の時と結び得ないようなのは「論語読 りましょう。田中首相これに対する成算ありやと問いたい。 今また国体を危機に陷れる田中首相の罪大というべきであ ではない)が危機にさらされよう。前に国の体面を汚し、 と甚しい。これからは共産党により国体(これは国の体面 共へ中共へと親交を求めたあの様態は国の体面を汚したこ います。現田中角栄首相が、台湾との信義を破棄して、中 国の体面ということで現今でいう国体天皇制とは相違して むるを奈何せん」と云って医療を峻拒した。その国体とは ないでしょう。 はれたもので、単に親と子という家族関係からの心情では 親に対する子の悲しみ、苦衷は長い日本の道統によって養 泣いて苦諫し、遂に自ら死の道をえらんだのでした。この し至忠の重盛には当然そのことすら許されなかったのです。 なかったようです。清盛もそうであったのでしょう。 につけたのであって、帝位そのものを奪わんとしたものは にまかせて幽したり廃して、自分に都合のよいお方を御位 さて病床にあって重盛が「外朝の医に頼らば国体を辱し

39

忠見るに忍びず、遂に自ら死せんことを神に祈る。事極れ かんとしたは、妖僧道鏡のみ。他は自家に不利の帝を権勢 りというべきでありましょう。 日本の歴史を案ずるに、天皇の御位に臣下の身にしてつ ま 人々によって日本は美しく伝えられて来ていることを思い が、重盛はそれを行ったのでした。このような至忠至孝の しょう。 「親子の理は絶対である」と新しい道では教えています

何 今 そ 畤 迄 地 迄 経 に っ て b n 親ずの 0 意

理 ۲ 間 は そ Ł 何 か ح 理 云 で ぅ あ な る n が ば

0 0 な 自 み る 分と云 たま 親 に が うこと 教 本 ż b 当 を 0 る

天 \sim み

そ

0

奥 で

ま

L

ま

す 体

غ

儘

放

ゃ

っ

て

ŧ

た

神 神.

た

ま

あ

っ

て

肉

0

真 そ

誰 死 生 ŧ ん ₺ て で始 知 る b 時 め ず に 7 E 解 ح っ 生きて て n を き 知 た る

元 教 一

人

0

人

間

草

垣

を

未

n は ₺ 今 迄 上そ 0 現 筈 61 な 天 か っ 親 た が

根気我解 2 が ら た 身 め ま 楽勝 ま 0 手 親 に 0 な る 智 慧 に 間 天 依 0 は 意 ŋ が

そこで 葉 で あ 0) ゃ 法 る に む 理 な 促 を ζ. ゎ ば n 大 つ 忘 自 n 然 去 ŋ

枝

知 0 ż 仕 な 由 来 込 る ん 天 40 で 0 あ 人 n ۲ 類 n を 0 を

た ح 切 は 吾 合 る ₺ 我 細 ら財 ら か に に 沂 天 に 教 付 0 理 ż 条t 絶 61 に対 て ع ら る L て

> 達 人 地 甦 ح

L

ح

の

が

を

ぐ せ

L

て

+

然年

子 ح

親

そ

61

け 2 め

に 果 L

ż

大

自

ح あ 43 0 あ 61 で 導 か る

髙

木

n が あ た b L 64 道 で あ る

之 Ŀ n 本 た 然 類 ٤ 代 天 を ま を 悲 ら 0 共 0 現・道代*の どう 願 玉 し お に 時 て ろ 代 0 つく に ŋ が 生の に ž 目 人 か み 人 b お的 類 新 生 て 間 み ž な を L 0 L 親 61 が て め < が し た 61 L ĥ た で

H

み

自

女史に 授 心 ۳ 道 そ 素 道 誠 を を ٤ 直 17 類 して実行 0 縁 吾 救 一な気 賜 捧 底 に 極 法 意 'n ょ 々 b げ か 持 る る っ を 賜 す で て 絶 る わ 対 賜 ん 時 道 っ な 戴 ぞ で 0 L 繫 0 わ 子 ら 今 で っ た っ 61 に た ば 7 て

神 そ 喜 道 お な 天 Ĺ 0 び が 0 の 勇 大 が な 0 誠 仕 報 手 に L 事 で 事 助 は 謝 す 17 道 を 道 が ż あ が 天 0 が な 先 ٤ 急 あ が ら に n

ば

これ 絶対

迄泌

み

て

道

0

₺

L 髄

0

į

0

絶対

に

秘 有 難 乗 'n ጛ

左 総 添 の て b 方 が L 総 て な る て 両 手 わ 天 で 0 か る 戴 意 筈 け に ば

下座に

徹

し

て

世

0

中 を

E

L

お 道

や

かたさ

ま

0 ゎ

荷

担 て

ž

今に

直

〈

成

ŋ

お が 結

も

n

ども ₺ 現

子

は

わ きま ぅ

ż

か

ら 等 Ė

ず

か

ع が 天 親

意

成

世

直 実

ŋ

右 気 身

0 負 12

方

な 0

る

我 が 7

が 湧

思

7.1

63 知

気 පී

持 n

61 てく

ż

よう/

で覇気を出

友互

61

に

に

なっ

よく// なさして頂く

練っ

て

よりによ

r)

ことなるを

b

益

Q

に

0

苦労

Ł

が

び

0 61 み を 置 前 に 61 て ぬ け 左 手 を ح

お み 邪 親 無 1+

<

n n

て Ø

元 切

親為替

ż

が

親

出

何

か

貰

b

ん

ح

負

た 遅 通 心 意

荷

物

が

b

た は

さ

n

ぬ

意

が L

実

E

ず

る

た な 0 61

ŧ n

る 真

E

迷

ゎ 汲

3 み

n

思

₺ 知

ح

ß 何や

ず

右

手

を

L

っ

か

ح

我

が

事

に

さあ

片 道 は 通 っ て 道 な る

出

一来る

쏰 親 育

なる

今

0

ح

を

嗅 何

は

っ

っ て

て

L n

て

る 頃 L

早

÷ で

0

恩

が 仕

ż

生

L

て

7

込

ま

n

7

身に じ L 43 足 かって つき て で 位 解 栄 悟 っ つつこん て堪 さて って 養 は 血 る 骨 か に 味 0 な わ

くぞ 急ぐぞ 逝 る時 ぞ 今や来 さあく さあ!



的理国际

厳しい批判のある中で、このような真剣

次のようなことが載っていた。 長を定年退職した教育者の手記として、

がした。

私は本年数え齢七十五才になるが、毎

最近読んだ雑誌に、先年高等学校の校

それは「自分は、いちずに教育の道を

来たと思うが、今にして空しく覚えるの て、ソウル(魂)の世界を忘れていたこ 体)とマインド(心)の世界だけを考え 満足感がないことである。ボディー(肉 は、ほんとうの教育をやって来たという 歩き、教育者として為すべきことはして

触れしめることである。自分の魂をはっ きりと把握せずして、他人の魂を導き教 は只一つ、吾が命をして永遠なるものに とに思いあたる。こうなることを救う道 5 ざるを得ない。 えざるを得ない自分であることに気付か

オロギー、其の他生活状態等について、 近頃教育者のパーソナリティー、イデ 究に向って、或は書を読み、或は話を聞 色々な宗教の門を叩き、只管心を傾

思う」とあった。

育することは不可能である、としみじみ

たのか、如何に活きることが真の人生か

ふりかえって見ると私は、二十才頃か

人間とは何か、何の目的で生れて来

うべきである。

と云ったような疑問を持ち始め、是の探

な教師の居ることに、私は心温まる想い

けたのであった。

原

そして三十五才の時、古事記の中の

朝新聞の死亡広告欄を見ると、同年輩位 って来た。私も何れはこの日の来ること の知人の名が段々と多く見えるようにな 用幣流国を修理固成せと詔ごちて天之瓊岐命、伊邪那美命二柱の神に、此の多蛇岐命、伊邪那美命二柱の神に、此の多蛇即ち「於是天津神諸々の命以て伊邪那の後世間成」ということを識った。

ないと云えようか、恥かしながら否と答 さてこの侭でその日を迎えて何の悔いも は逃れられない自然の定めごとであるが、 として又無限の実在として在りながら、 矛を賜いて言依さし賜いき_ これを解説すると『宇宙は永遠の現在

まことに宇宙は神秘極まりないものと云 び」を与えると云う一面を持っている。 の規範のもとに万象には自由な「生の喜 一切を内に生滅せしめつつ、しかも一定

られている。しかるに私共人類は、この 成する万象の中の一員として、生を与え 私共、人類も亦、この神秘な宇宙を形

与えられた生の中に於ける自然的生以外

に る、大自然の法則に則って生きる、日本 こと、これが惟神(かみながら)に生き 固成」の四字に尽きると云うのである。 自覚的創造はつまるところ、この「修理 真理を表現し尽して余すところがない。 覚的創造の極致として、永久不変に又、 必然性や普遍性を成立せしめるものであ める条件であり、同時に人生そのものの の総てを代表する全面的なものとして、 値付けられる生活の面こそ、人間として の一面を持つ。 的過程とするところの人間としての生活 分野の中に修養と活動とを、具体的な行 出される人格と文化とを価値内容とする 合を形態とし、自覚的活動によって生み 創造を精髄とし、その創造の為には、和 無限に宇宙に遍満していて、万古不易の 人間以外の一切からそれ自身を区別せし 「修理固成」を人生の目的として生きる そこでこの建国の主旨とも云うべき この自覚的活動と云う過程の中に、価 修理固成と云うこの言葉は、即ち、自 自覚を本質としつつ、それの下に、 なる。 訳だ。 能だと思う。 しての人間の生活を想像することは不可 ないのだから、誰も現実に見た人はない 是が心だと手にとって見せてくれた人は だが、心の方は、古今洋の東西を問はず、 かあるのではないかと思はれた。 更改めて云うまでもないが) ところに何 心とが一つになって構成されている(今 のは、目に見える肉体と、目に見えざる あるのかと考えて見ると、人間というも 突き当ることがある。どこにその原因が が、常に右すべきか左すべきかの迷いに 強くしたのであった。 の人生の意義であると悟り、大いに意を め人のために生きることこそ、ほんとう 国民として生れた自分は斯くして世のた の自由にならないのが心だということに 心付けば自らどんなものかは大体判る訳 併し日日の百事百般の事象に、心なく 目に見える肉体については、人間、 ところが、日々起ってくる百般の事柄 ところが、自分の心でありながら自分 心」「霊性心」という二つのものが、そ 心のその何れかを根本としてそれが意識 ものも、これに集約するならば、前記の の内容をなしている。 が存在する。 別すると、左の二つのものがある。即ち ように云っている。 のである。 領域に発動した場合の現象を指している に是を細分すると、その内容に「動物心」 く歌った道歌だと思う。 述の「動物心」と「植物心」は、普通の 「植物心」「本能心」という三つのもの そして肉体生命に属する心の中で、前 それ故に復雑な各種の心理現象という 又一方精神生命に属する心には「理性 この判りにくい心を、 そして肉体生命に属する心の方は、更 右は作者は判らないが、哲学的に面白 『心にはその性状と活動の状態から大 、肉体生命に属する心 精神生命に属する心 心こそ心まどわす心なれ 心 心に心ゆるすな 天風哲学は次の

るということである。 悪心、 差支えないのである。 は、皆悉くこの本能心の中にあると見て 用及び各種の低級情念というようなもの の内部で行はれている一切の動物的の作 も、この本能心から発露されているとい 物的感情情念、即ち闘争心、復讐心、 る、が特に注意すべき問題は、一般の動 は一切の感覚念等の如きものがそれであ 肉体の慾求から発生する各種の慾望、又 ているものである。 なので、この心がその本源となって司っ はなく、常に本能心と結合しているもの るものを直接的に作為する性質のもので する方便を行なっているものなので、従 部で、その肉体生命営為のために必要と 正確にいえばこれらの心は肉体生命の内 面に現出活動しない特殊の心なのである。 場合他の心のように単独に意識領域の表 って所謂一般にいうところの心理現象な たとえば食慾とか、性慾とか、その他 いずれにしても結論的にいえば、肉体 いわゆる動物本来特有の低級心性 猜疑心及至は 嫉妬などというよ 崇高な思想というようなものは、一切こ 者がいる。 が、是は間違っているという説をなす学 体に健全なる精神宿る」と云うのがある と共に人間を構成していることには何人 くいものであるが、精神と呼ばれて肉体 ある。』とある。 の心を本源として形成されるものなので ものなので、所謂神秘的な偉大な思索や、 殊なものは、何れもこの心から発露する る、かの霊感とか霊智とかいうような特 普通人には容易に発現し得ないといわれ めて優秀性を有する最髙級のものなので、 心は吾々人類の精神のみに特有された極 る名称なのである。 性というのは、この心の活動現象に対す 対する推理推考を司る心なので、俗に理 であるが、この心はいわゆる事物事象に も異存はあるまい。 このように心というものは実に判りに それから最後の霊性心であるが、この それによると、この諺の語源は、昔口 昔から云われている諺に「健全なる身 次は精神生命に属する理性心について り、社会の為めに大いに貢献した人々は が宿るとするならば、不幸にして生れつ もあり、病弱な体を持っていても強く正 ポーツマン等でも弱い曲った心の持ち主 布されるに至ったということである。 えられて、果ては今日の如く普遍的に流 れない人々には、宛然金科玉条の如く考 替え、それが唯物以外の真理には目も呉 ずして物質論者がその物質至上論に都合 **もて健全なる精神を恵みたまえ」とあり** 如きはその最たるものと云えよう。 枚挙に暇がない。故ヘレンケラー女史の で困った人が、成長して立派な人間とな とになる筈だが、世の中には幼年時病弱 き虚弱な人は一生健康には恵まれないこ しい心の持主もいる。 れた身体と精神の二語を、主と従に置き よく当て篏まるように、この並び称えら しを、後世物質文明の旺盛期に至るや期せ 言葉に「希わくば、健全なる身体と、そ ナリスに組立てさせた神に対する祈りの 若し健全なる身体にのみ健全なる精神 現実を見ると、健全な身体を持ったス

ーマ法王二世が、

側近の哲学者シュウベ

こう「切いない、よくないであり、この二者を統率すべき更に高次でれを思うと、心と体とは同等のもの

元の何物かゞなくてはならないと思う。一でないと思う。一でないと思う。一でないと思う。一でないということが云はれている。一でないと思う。とを教えてくれた人は古今東西未だかっとを教えてくれた人は古今東西未だかっとを教えてくれた人は古今東西未だかった。

はあるまいか? 今日の人間不在の悲劇の原因があるので 安する人のある現状なのである。こゝに でする人のある現状なのである。こゝに

、に生きることである」と教えられ、これにご縁を得て「真の人世とはこの魂のま実に不思議としか思えない「おやかた様」を通しての、そしてその在りかを神秘に神業によと、そしてその在りかを神秘に神業によと、そしてその在りかを神秘に神業によ

私は「あたらしい道」を知り、天人女涙したのである。の中の血がひきしまるのを感じ、思わず

や、その言葉を知らないものである。た吾が身のこよなき幸を何と感謝すべき

自分で自分に驚く

であげ 史にお目にかゝり、自分のみたまをよび 中村 豊 一

行を無事終えられ、羽田におり立たれた た天皇・皇后両陛下が訪欧七ケ国のご旅 たい」というお言葉を残されて出発され 「各国の実情を見て、親善の実をあげ 五体で私はその時 "日本人" であること 醒していただいた。 だからであろう、知識や観念ではなく、

動をおぼえた。 陛下の、秋空の如く澄みきったかなし

お姿をテレビで見て、私はいいしれぬ感

を自覚した。

ご旅行であったとは云えないように感じ 乗新聞等の報道によれば、決して平安な な

したということも知らされた。かにはひややかな視線の中をお車が通過られた。温かく迎えた国もあったが、なられた。温かく迎えた国もあったが、な

めにより一層努力する」とご挨拶されたような面もちで、「今後も世界平和のた己が罪ごとく抱きかかえられているかのとみで見守られ、人類の「業」をあたかもとみで見守られ、人類の「業」をあたかも

でである。 この陛下のお姿を見て、私は自分の体のである。

ことであると知って、而も その 教え 主れ即ち惟神(かみながら)の道に生きる

「天人女史」と時代を同じくして生を得

思っていたのである。 思っていたのである。 思っていたのである。 と話をそこに発見して、私は自分で自分に驚愕したのである。 これまでの私は、二重橋の前を車で通るたびに、東京の真ん中にこんなに広いるたびに、東京の真ん中にこんない広い

とを自ら発見するのである。て、日本人はほんとうの日本人であるこちせるところ、そのみたまの開顕によっらせるところ、そのみたまの開顕によっ

述べたものを文にしたものである。 (京の青年中村豊一君 (二十九才) が一言註 これは、去る三月十四日の朝礼の時、東

つながるえにし

--- 縁ある人と恩ある人を訪ねて



その一栗東へ行く

見ると間もなく栗東の出口である。

「二十四時間営業です。いつでもおいで、滋賀県は名神インターチェンジのあて、滋賀県は名神インターチェンジのある栗東町まで出かけたのは、一月中旬のる栗東町まで出かけたのは、一月中旬のる栗東町まで出かけたのは、一月中旬のる栗東町まで出かけたのは、一月中旬のる栗東町まで出かけたのは、一月中旬のると間もなく栗東の出口である。

「場」をたずねて来たのは、十年余りも昔のことである。「新しい道」とつながりのあるサーる。「新しい道」とつながりのあるサーる。「新しい道」とつながりのあるサーる。「新しい道」とつながりのあるサーを求めて八方破れの武者修行をしていたらしい。私は東京で一、二度会っているらしい。私は東京で一、二度会っている。らしい。私は東京で一、二度会っている。らしい。私は東京で一、二度会ってからというもの、で、だが、Jさんは天人女史に出会った。だが、Jさんは天人女史に出会ってからというもの、「松木草垣女史に会ってからというもの、「松木草垣女史に会ってからというもの、「松木草垣女史に会ってからというもの、「松木草垣女史に会ってからというもの、「松木草垣女史に会ってからというもの、「松木草垣女史に会ってからというもの、「松木草垣女史に会ってからというもの、「松木草垣女史に会ってからというもの、

私は自分の行きかたに根本的な反省の光

Jという人が羽曳野の「新しい道」の

断を受けた時のことをこういう風に書き 分が著わした本の中で、天人女史の御明 を向けざるをえなくなった。」 Jさんは自

出している。 を考える。」その結果、 て、つら~~我が身の来しかた行くすえ の朝、私は南大阪神光苑の奥座敷に坐し 師である。」とも書いている。「十月十日 「まことに遇いがたきは人、人生開眼の 苦を避けようと

えであった。あまりにもズバリと指摘さ ては惜しい。それがJさんのみたまのこ に安んずるなかれといわれている。本当 る。まだ三十代であったJさんは、小成 れて、私はひるんだと正直に書いてある。 かメノウぐらいの程度で収まってしまっ はダイヤモンドになるのに、サファイヤ そのJさんに宛てた天人女史のお手紙

あり」に収められている。 先日はお初にお目にかかりまして、 昭和三十五年)

が一通、天人女史書簡集「苦難の中に光

ほんとに其節は失礼いたしました。 産みの子の様な美しい「へそ」のお

人におあいしました。 無、そおあったらたいしたもの。「へそ」とは成ってみてわかる。 あたらしいお近づきをいただいて、 心。 は。

はたして居ります。

む。私はそおゆう不思議な女に成りま 心の底からよろこび居ります。 人を拝するとよろこぶ、でないと悲し ついじぶんの主張とがっちしているお 心と言ふものは、とかく勝手なもの、

でこまる。

「のしかゝる苦労」ではなく「自ら買い求

せず、むしろ苦を買おうと決心する。

める苦」が自分をつくってくれると考え

した。

はたしに成る。 ほる必要があります。ほりにほってお してあります。それはどおしても下を 「へそ」は正しい、思ひは苦。 思ふより以上のおもいが、人は得手

は 、すおつもりで…… だから又いらっしゃいませ、 かりか

人はかりがあります、貴君もすこし。。。。。。。。。。。。

をお見せに成って、

はっきり「るつぼ

にはまって下さい。

貴君を私は見ています。

れます。光とはそら、日様をむだにし かりは日を過るとだん/〜光がうす

> た。 いまその月が、月月に月を加へて苦を 私は日様にだかれて月にしこまれて、

もない。でもそれは智がむさぼりとっ のははたしかたが、素直に天にみさだ てしまうから、反するかたちと成るの めてもらって、そのとおり通れば何で Jさんおたがいは因縁で、「こわい」

す。私をお知りに成ったから時々お顔 役にやりとりがしきりにあります。そ私の役は何とも云へぬ変な役、また、 ます。貴君は自然の成り行きで結構で たしくら、そおゆう具合もまた妙です。 れがまた人をはたさす。人と我とのは とにかく私は座からしばられて居り

「るつぼ」とは天職です。 だがJさんは「るつぼ」にはまらなか J さん さよなら 草垣

った。「新しい道」につながらず、ほう

人女史とその「新しい道」について教え め役をしていたIさんという御老人が天 に時々顔を出していた。その会合のまと 勉強していて、徒然にある宗教的な集り らせてくれた。 時々風のたよりがJさんの 私は好運であった。京都の大学病院で ″奇行〟を知 目をしっかりとたて直しなさい。この道 角の筋々がもつれてよれてしまって、ご 上手に世渡りさえ出来ればい、という風 今の世の中は筋目なんかどうでもよい、 でいらっしゃい。そしてこの道でその筋 では惜しい。是非この道に時々足を運ん 自分が仕憎くなってしまっている。そ になってしまっているので、あなたも折

き星のようにまた遠くに行ってしまった。

お人であるといってくださった。

しかし

いている。

医者という職業はかみから立

だが

本

ながら、羽曳野まで足を運んでよかった の前にすわらせていただいていた。 後、私も新しい道の場の一室で天人女史 天人女史はだいたい次の三つのことを 私はえもいえない心の安らぎを感じ その 「自然」とは必ずしも山川草木と限らない。 分が現在置かれている環境をこそ「自然」 「自然をおがむ」ということを教えられた。 を正すような行き方の道である。 そうではなくて、葉っぱ一枚~~の葉脈 いなむしろ自分の周囲に成って来て、 つく~うなづく思いで聞いていた。次に 私は一 自

と喜んでいた。

てくださった。十年前のある春の日の午

の教えは十把ひとからげの教えではない。

はないか。

爾来、私は曲りなりにもこのおさとし

自

す役割。これこそ文字通りの「天職」で 理」を世の中の人々に伝えかつ教えさと 先生。つまりこの「新しい道」の「天の 当はもう一つ上がある。それは「理」の なさい。だからそれが「天職」。 てられている尊い仕事だから大いにやり

この筋目の一つ~~が「理」であって、 呱々の声を挙げるのだということである。 おとい筋目を分に応じて埋めこまれて、 いうものは生れる時に天からみたまにと おさとしくださった。まず第一に、人と (至らない点)を悟り、自分を「理」に沿 て、それによって教えられて自分の不 む」とは、まず成って来た姿をいただい というべきである。だから「自然をおが

> という他はない。そして十有余年を経て 展開しつ、あるのを実感する。しあわせ - 48 —

分の前に充実した生き甲斐のある人生が に添うように努めて来た。そして今、

今再びJさんと遇う。縁とは不思議なも

のである。

Jさんが私の想像していたよりも老け

度は日本の文化を海外に伝える仕事をし 力して来たが、それにはもう倦きた、

たいと語った。だが全てを自然の成行き

史は私にあなたはその筋目の多い有難い

ということについてもおさとしをいただ

ある。それからJさんと同じく「天職」 うようにやりかえていく努力をいうので

真の人生の生き甲斐なのである。天人女 それを一つ~~立てお、して行くことが、

> のところは変っていない。Jさんは今ま 知れない。ざっくばらんで明けっぴろげ た感じがしたのは伸ばした髭のためかも

では欧米の文化を日本に紹介するのに努

には脱俗の俳人尾崎放哉のなくとも一向に騒ぐ風もない。その心境ろがあって、大勢の家族を抱えて定職がらしかった。それはそれで徹底したとこらしか

大空のました帽子かぶらず

入れものがない両手でうける

さんへの催促であった。坩堝は湧き返っさんへの催促であった。坩堝は湧き返っはないかと思えた。しかし「新しい道」ははたしの道。「人と我とのはたしぐら」果し合いの道である。捨てるのではないはたすのである。おてるのではないはないがと思えた。

話し終えて辞去しようとした時、急にわせる天の仕組みにほかならない。「陽者」でられていなければならない。「隠者」では困るのである。飄々乎たる孤高の人では困るのである。飄々乎たる孤高の人では困るのである。飄々子とる仏高の人で熱せる天の仕組みにほかならない。「隠者」でさんへの催促であった。坩堝は湧き返っさんへの催促であった。坩堝は湧き返っ

た。「瑞祥ですね。」この点では意見が一三上山に見事な虹がかゝった。美しかった。すると部屋の窓から真正面に見えるしぐれて来た。すぐにやんで薄陽が射し

栗東のしぐれはやさし虹の楯致した。

- HKMAL

その二 その夜の「松の間」

せを感謝した。それに対して天人女史はしい道」につながり得た我が身のしあわの自分の率直な感想として、改めて「新人女史とのやりとりである。私はこの日の修行があった。「松の間」は道友と天の修行があった。「松の間」は道友と天の後も「新しい道」の「場」では、その夜も「新しい道」の「場」では、

そして更に続けて、「あなたはIさんのぶ時が来ますからね。頑張るんですよ。みじみと自分はしあわせだったなあと喜「よくおわかりになりましたね。今にし

こういわれた。

てくれたIさんがいなければ、今日の自私に、この道のことを熱心に説き聞かせ学の道からもはみ出しそうになっていたた。私は胸にこたえるものがあった。医と京都のIさんの名を挙げて念を押される。

その三 洛北の冬

なるのである。

倒れて体が不自由になって、もう数年に分はなかったからである。そのIさんが

だから家族の人が留守であるとすぐに知るのみである。いつもはこんな事はないが、奥の座敷からテレビの音が聞えてくが、奥の座敷からテレビの音が聞えてくい。
はて案内を請うた。
返事がなかった。
場けて案内を請うた。
返事がなかった。
場けて案内を請うた。
の事がなかった。
ところに
こめんください。」と呼ばわった
のみである。
いつもはこんな事はない。
のみである。
いつもはこんな事はない。
のみである。
のみである。
のみである。
のみであるとすぐに知

れた。 が独りで見ているものなのか。 たろうか。家族の方がIさんのことを、 この前に伺ったのは晩秋の頃であっ するとあのテレビの音はIさん

には無心になってテレビの前に坐って のないことのみ多い世の中である。 この頃耳が遠くなって来て困ると話さ いるIさんの姿が容易に想像出来た。 れた。恐らくは、Iさんには聴く必要

するのを楽しみにしておられた様であ 秋頃までは、朝早く起きて近くの加茂 川のほとりを、奥さんの介添えで散歩

にその条が増えていった。

ついた。しぐれて来たのである。見るま 暮れていた。と、一すじ二すじ水の条が の常日頃のおさとしである。

帰途についた時、車窓の外はとっぷり

らとんでもありませんよ。」とは天人女史 る。「自分ひとりで偉くなったと思った あった。人の恩を忘れては人でなしであ らなかったかと、思い知らされる思いで

るが、寒さが厳しくなってはそれも無

し」の真ん中で立ち止まる。上流の北 歩いて加茂川を渡る。「きたおおじば 置くと、そっと外に出た。まっすぐに 理であろう。 私は手土産の菓子折に名刺を添えて

附

記

この小文はこの一月に書いた。その後

神のわざにて化育全し 求心と遠心力の釣り合い

は

も私はIさん宅へ足を運んで、天人女史 信をとりもどされた。しのぎやすい季節 のお言葉を伝えた。Iさんは感激して自

道〟の存在を教えたのは、他ならぬJさ んであった。つながるえにしは不思議な

ることであろう。そのIさんに〝新しい となって、Iさんはまた散歩を試みられ

ものである。

(終

Iさんに聞く値打ちのあることを何故 もっと~~聞かせてあげる機会をつく

の風景を見るともなく見ながら、 東山連峰に大文字山が見える。それら 景の中に、ひときわ高く比叡山が聳え、 山から吹きおろす風が冷く冬ざれの夕

私は

松木天村先生に

天津御神のお叱りのあり いざなみは言先だちてふさはずと

菱

かしこいざなぎ 生みて生みけり いざなみの殺しの数を上回り

獅子口に蠟足りゆきて 村々に

天の声説く ひじり尊し

紫の此の糸たぐり いづち向きても 神々の里 求むるは

自宅のアトリエにて 関誌 12 月 気になっ n 麻 0) てお訪ねしまし なり、 から、 人々に 布 私は、 に感激 私 暗 0 は、 中 機 械 昭

模 三十五年の信仰生活

I. 和 具店

0 佐瀬

勇

社長を初

した。

四十五年

月七日、

東

京

産寸前から救われた体験談を読んで、 すめで入信していたのであります。 某宗教団 「光の泉」 ある県を一人で普及開拓 して、 S教団県連会長 佐 すでに三十五年前の昭和十年 たのでありま 知 3 体 瀬氏と同 せ 誌に載 私は佐 以下S教団という) た。 そのた じS教団 瀬社 っていた同氏 講師会長、 め 長を訪問 東北で有名 長兄の する の破 沢 0 宇 そ 2 機 Ш

佐 Z 光 Щ

天人女史に解逞し得たその時、 滂沱として涙が流れた。

---それから、

たが

わけもなく嬉しさがこみ上げ

私の人生は大きく陽転した。

した。 L 治別格本山理 方、 商売も大きく経営しておりま 事、 S政連支部長等を兼

人が、 ところが、 やすべく、 生活をしなけ 年に破産して、 瀬氏をお 風前のともしびを今一 すると、 家内の内職で細々と暮すあわれ 同 その秘訣をお伺 訪 氏は開 ればならなくなりまし どうしたわ ta L 宇都宮市の長屋に家族 たのの 口 であります。 度あ けか昭 いする心組で かあかと燃 和四 + 五. Ŧi.

のS教団 訪 私は、 でありま S教団 私はそうは たのに、 何 は株式会社であ か では業も因縁 11 思わ 話をお 余りにも な \$ 聞きする る」と申され 13 無いと云うけ また、 ため 最近

0)

お

L

突飛なこと

n

佐

今は、他のほう(新しい道)を参究して もそうだったっけーと思い当りました。 んこれはノルマの割当本の残りだな、俺 務所を提供され、ご自分も地方講師であ 位はありました。 たすと、S教の新刊本がトラック一台分 ました。そして、同氏の会社の中を見わ その本の山を眺めて、 佐瀬氏は、「S教だけではいけないので 同氏はS教連合会に事 私は、 ははーあ 聞きながら、そんな疑問が沸々として湧 した。 これやと四面楚顔の声に包まれる有様で 底にまで落ちたのか?』-佐瀬氏の話を 年間もS教を信仰しながら、 43 てくるのでした。 業も因縁もないならば、 波乱万丈の過去 日暮れて道なお遠 最後にどん 何故三十五

りました。

をズバリ言われて、

私は絶句してしま

らかけてくれず素知らぬ顔、

逆にあれ

ゃ

たが、長兄の一周忌の時から東京へは帰 く死にました。 二人が踊るようにして喜んだ後、間もな 芸術が出来ると云って、アトリエで私と 展、堀進二先生のもとに通っておりまし ķì かたわら日曜毎に、日本一と称される日 た長兄(彫刻家)が、これから本当の その当時、私は東京で石彫刻をやり、 顧みると、昭和十年頃、私をS教に導

妻が突如

部を建設し、その献堂式の際、

それが〜立派な社会人となっております。

昭和三十三年十一月九日にS教団教化

子供達を東大や歯科医専に入れ、

今は、

3争中や戦後の物資が殆んど無

い時も、

た子供三人を引き取っていました

時に私二十五才でした。

(その前にも姉が夫に先立たれ、

残され

始めることになったからであります。

と言われ、十数才も年上の兄嫁と子供三 二人あるのでとても育てられない

から」

人を引き取り、そのために田舎で商売を

皮肉

- 52 -

される席上で「佐々木さんは功徳を積ん

自分の造った

行くところとてなく、

やがて四店も大きい支店をもつようにな した。そしそ、再び裸一貫で商売を始め 化部にしばらく居り、現在の妻を迎えま

にも本部理事長や各県連合会長等の列席 心臓マヒで死亡しました。 それは、

追い出されてしまいました。

泣き面に蜂といいましょうか、今までに ば絶望的な気持にとざされた日々でした。 虚ろな空間の中に吸い込まれるような半

(S教時代) 私が

お助けした方々、また、

かえた私は、日夜焦燥にかりたてられ

も新聞の就職欄に目を通して職を探して

その頃、失職状態であった私は、いつ

いる」とのことでした。

てくれるところはありませんでした。 おりましたが、明治末年生れの私を雇

小学校と幼稚園の小さい子供三人をか

今となっては誰一人として慰めの言葉す 十数年間も育ててきた兄姉の子供七人も

ててくれ、

自分は、

六番目の後妻と子供

とその子供(小学生)三人を引取って育

それは、父(彫刻家)から「長兄の妻

らず田舎に留まることになりました。

家内を新しく迎えたいと申したら、 そして、一周忌の夜、育ての子供達に、 るよ」と話されていた最中のことでした。

だから、これからは素晴らしいことがあ

りました。

ート建てのS教団教化部を建設しまして、 そこで、新しく東北一を誇るコンクリ

を受けたのであります。 私一人の個人保証で銀行から多額の融資

々の援助(寄附金)が思うように集まら ところが、当時不作のため、 地 元の人

あります。 五年の一月ー遂に破産してしまったので 私の銀行貸出しが止まり、昭和四十

やむなく、宇都宮市にいる義弟を頼る

でありました。

やかた様)にご明断をいただいた時から れられて大阪の土を踏み、天人女史(お

を越えて、泣きながら義弟のところへ辿 べく、家族五人が、折しも降りしきる雪 り着いたのであります。 の中を車で突っ走り、 除々に積る雪の峠

る ″業も因縁もない∥ とは一体どういう 不幸を三度も経験した私は「S教の教え こうして骨身にしみるような大きい

ことなのか』「それが現実の救いとどう結 S教の十日間練成会に参加したりしてお す。そこで、尚且つ私は、 く対決せざるを得なくなったのでありま びついてゆくのか」ーそんな疑問と大き 一家を連れて

りました。

苦海を去る

ゲスト講師)と、佐瀬社長の御両人に連 の東京支部長内藤泰春氏(元S教練成会 ともされる日が来たのであります。 迷していた私の心にも遂に大いなる光が こうして、いつ果てるともなく暗雲低 それは、昭和四十六年五月、新しい道

ころから鎌倉市に引越して、木彫刻をや は 掌を返すごとく光輝く第二の人生が開き たこの時から、真の幸福の元をいただき、 っておりましたが、天人女史に邂逅し得 じめたのであります。 その頃は、すでに宇都宮市の義弟のと

ぬうちに、私は、ただ男泣きに泣けて 史のお部屋に入りましたら、 人女史にお声をかけられても、 / \ -----、『さあーどうぞ/ \ ---』と、天 さて、ご明断をいただくべく、 何も申され なか 天人女

何か宗教をやられた方ですね』

ませんでした。やがて

座布団のところへにじり寄ることが出来

会で、天人女史とご一緒であったことも 開口一番、そう申されました。 わかりました。 昭和十一年春、私はS教の第一回講習

です。俺は三十五年間も一所懸命夢中で てきて、一回の講習会で中止されたそう じゃない、祈るんじゃない〟と声が聞え 天人女史は、 神想観をしたら゛祈るん

とビックリしました。 ています』と申され、よくもわかるもの 良いが、画はどうですか。画が性に合っ そう苦労される方ではない……。 「上因縁で神はかりで生れたお方だ。 彫刻も

画を習ったのです。) は東京春日町の川端画学校に入り、水墨 続いて、すぐ横に座ってられた佐瀬氏

(十六才)のとき、昼は労働しながら、夜

『この方は、 ぜい沢する方ではないから、

に、

やってきたことが馬鹿らしく恥かしくな

りました。

生活をみて上げなさい』とも申されまし

と申されました。 『あなたは、 "よく出来たね』と座るお方ですよ』と ちゃんと出来たところに、

欣喜雀躍の日々

ない。あくまでもお行のところであり、 この道は、ご利益信仰するところでは

せん。

とならせて載いた喜びを知った私には、 当然の帰結のように、嬉しいお蔭が次々 頂き、天人女史を親として載き、道の子 おります。しかし、この道に繋がらせて させて頂くところだとお教えいただいて 国替えをめどう(目標)に自分づくりを

が、私の以前の家はせまく、榊原氏が見 んにお話して、道に繋がられ、 にお住みの前大和投資信託社長、 るに見かねて、土地があればアトリエを は、鎌倉で練り合いをしていたのです 昨年 (昭和四十七年)一月、同じ鎌倉 一月から 榊原さ

と湧いて来たのであります。

附いている空家が見付かりましたので、 建ててあげる、と申して下さいました。 エ用に十二畳の部屋もあり、応接間まで 間もなく近所に六部屋もあり、アトリ

ご相談しますと、早速「心配するな」と てお金を出して借りて下さいました。

い進出来る喜びは、たとえようもありま せい/\と広いところで、日本画にま

引越しは昨年五月末でした。

えられ、また他人にも説いてきたのでし S教では、三十五年間、無限供給を教

私に『苦海は去った。もう良いことのみ がらありませんでした。 たが、事実あったでしょうか。恥かしな 天人女史は、昨年の春の「松の間」で

沢山あるのを知っています。天人女史は れるが、上因縁の方はS教では救われま 『S教では、そこ~~の因縁の方は救わ

ですよ』と申されました。

S

教の大幹部で不幸になっている方は

倉市のS教の同友上村さんにお話したら

草木染の大家で大平洋展の審査員で鎌

せんよ』とも申されました。

天人女史に全面降伏(幸福)

昨年十二月三日の夜でした。

十五年間の信仰を止めて繋がって下さい (私が道に繋って三ヶ月目) 早速S教二

ました宇都宮市のS教の大幹部数人も繋 ました。また、かつて一年間滞在してい

がってくれ、共に救われております。

して理を吹かせて頂いている今日この頃 共に働かせて頂きましょう―と声を大に 国替えに南無になって(無我になって)

―来れ! 上因縁の方々よ、救われて

でございます。

ではない。みな自分のためだ。 して練り合いに行っております。 毎月、宇都宮市まで、先生方をご案内 『苦を喜びなさい。 苦は買ってでもし 人の為

なさい。そしてまた、陽気になりなさい』 とよく天人女史は申されます。 素晴らしいお言葉です。一つ~~実行

することだと思ってやらせて頂いており

に証明出来るか」などと、理屈をこねて なか/〜理解出来ず、「そんなこと科学的 のご指導でした)、 練り合いのとき(同じ先生からの三回目 おりましたら、やがて〝紫の間〞が始ま しい 道の場で行われた、 神秘な面のお話が、 個人単位

り、次に十一時頃から〝松の間〟になっ

たのでありますが、その時に、天人女史

と思います。

0

ましたら、 すると、

史を女の方の姿として、その形を見て心 んじゃない〳〵。天の声だ〳〵---」と約 中では何か批判的な一面も働いていた 時間位聞こえました。 失礼ながら、御老体であられる天人女 御垂示は聞こえず、「形を見る ある時、紫の間に座っており で あり、 丁度、私がこの道に繋って間もなくのこ 終りです。この道は、一葉一葉の教えで ても信ぜざるを得んように-----。 ん良くなって変ってゆきました。 どうし ておる駄々っ子でも、生活の方はどんど す、と言われるゆえんはそこにあります。 け一例えば、『三界は唯心の所現なり』で こうして、私のように現屈をこね廻し 昨年八月頃、かつての破産の余波が 裁判所から支払命令が来ました。

今はただポカンとしています。すると、 にかけている編物等をしておりましたが、 が私に次のように仰られました。 「二年位前までは、自宅では、この膝 しておられました。「いや全然そんなこと 終始、妙なる音楽の音のみ聞えてきて、 はない」と申したら、「不思議だ~~! 「今晩は何か音楽をやってたね」等と申 先に記した上村氏は、ある日紫の間

先程の科学的云々と理屈をこねていたこ 色々なことが聞えてきます」―― そのお言葉をお聞きしたとき、 毎晩、 と申されました。

は、

とに対するご親切な御解答をして下さっ の御垂示を下さった後、 天人女史が我々に紫の間で、 また松の間では、

たように思いました。

私達の発言する所感や体験話などを直接

以上も離れているのだから、 超電波探知器以上だと驚きました。 の話のやりとりなど聞える筈もないのに 天人女史のお家と、道の場とは三百米 やっぱり、 全面降伏しました。 見抜き見透しだ---« 練り合い中 それから理 うか、他処では十把一からげと申しまし 導下さいます。 この間二時間半にわたって一人々々ご指 なお返しのお言葉を頂くなど―こうして 丁寧にお聞き下さり、これに対する適切 実際、こういう処は他処にあるでしょ

屈を言うのを止めました。

ょうか。一般的、

普遍的な教えがあるだ

ます。

行動することが最上だと教えられており

です。

頭を悩まさず「みたま」のままに

りました。相手が敗けたことになるそう

た得をした」と申され、それっきりにな

「原告は受けて立たぬから、

貴下は大し

天 ら 申し立てをしましたら、 とでした。鎌倉の裁判所へ行き、

と再三電話がありました。ところが、 /〜ある日、横浜の裁判所へ行きますと いましたが(みたまの知らせが)、とう 浜に行くのがおっくうで、ぐづん~して 市になると言われ、その日を待ってい 先方の原告さんより「取下げてくれ

異議の

正式裁判は横浜 **— 55**

申され おり 女 の子 7 ま ま 驚 た、 たと す 供さんは か PTAで私 7 言 63 2 0 る。 最 7 三人の子 何 近 10 ま あ 0) か す。 特 ま んは先 殊 ŋ 供 1 な 良 の先 教 育 くな か 生. を B から L 0

せて頂 私 0 つ 0) 仰 きる 大安心 0) 南 お るこ 天 無 中 くこと、 毎 か とを 無 日 0 0) た でご 私 境 報 様 謝で 即 地 時 3 天人女史 13 て、 0 あると 断行 なりきって、 ま 只 即 人々有 することーこれ ち、 決意してお つお 難 天 B 42 、かた様 道 0 0 12 全托 尽 ŋ 語 3 ŧ かい

天 2 術

す。

文が " 色紙 八年 如く、 先に申 まよ 度 ン あ n, は をして 百 ŋ _ 絵 L 枚注 ま まし 必 を 杯 らず 秋 す。 画 画 頃 水 文 42 き た 例えば、 量 墨 あ 7 初 通 3 霊感が も 2 画 9 8 ŋ 知 を か ま き あ 5 天 画 したら、 き 3 生 丑: 人女史の 3 < 一懸命色 年なので牛 n n わ まし け 重 な 今年 量 で 10 程 た。 す 仰 あ Z 3 が 0 度 四 せ

てそ

0)

通

現

る

3

ば

力

ラ

た。

0)

蛙

を

取

n

17

7

か

5

夏

て

た

そうだ、

芸術

の本質 に

だり す

綺麗でよく似

写

わ 紙 it

だ。 再

色彩

0 な

奥に量感だ

午后

病室を あ

廻っ

た

6 付

患者

さんに

御礼

生.

命 だ、 真でよい

躍

動感だ!と、

力強

61

2

たま

0

言

b

れました。

夜になると、

今まで

何

み・デ

0 注 + 0



なら こと)。 た。 動 から与えられ 五 を出 一十匁と .4 なら せ かニ ٤ た万物に ば 0 Ŧi. + 2 + たま - タと 貫と は 0) 生. か、 か 2020 命 そして、 がある。"躍 百 やきでし 貫 天 鳥

> るお 14 先 お び 写 2 8 吉 真 常 か か に たさ 12 聞こえてきまし 御 T ま 礼 1 を申 1) I 天 L 0 1 F. 棚 女 た。 げ 12 ま お L 飾 お お B \$ ŋ L か b た ず あ

たし、 士山 美術 てい 絵でしょ ٤ る S 0 日 言っ 絵を見 は 画 無限 う。 氏 道 の学 てとても喜 が 友 他の 0 7 7 校を出 " > 重 お 私 量 絵 医者 0 と違 感 n 画 た先 が h は 3 42 ラル あ でおら 剧 た富 h でア n 刻 生. 家の 2 かい 1: ほ × n Ш まし 2 め 画 1) 3 0) 力 13 そ た n た 富 0 0

その て下さい ると、二、 12 蛙 油 を 3 0 絵 頼ま ので 美術 絵に ある池の が出来上 さきに、 院長さんがこん を n あ 0) とのことでした 科 まし 5 所 四 0 展に ある 有 ところ ね 日 て、 た。 ば 者 後、 出 病 10 その大きな病院 病 院 何 なことを言 電 置 から 7 院 ٤ 5 話 63 お 長 祈 か いさんは 0 かい 7 6 ガ 0 0) 来まし で行きますと 幸 あ n 7 7 0 る 蛙 お 福を与える その上 東大出 わ 7 方 ŋ 石 です。 た。 n 是 0 ま 中庭 ま 非 彫 来 す

指導層に捧げる本 ŦI 木天 しい道」入門-場は重く、国内の諸問題は息束に艮隹)に国事いよく〈多端、世界における日本の・ これからの生き方を指向する書 しい角度から取りあげそれに対処する人間の げるべく編集されたもの。 加えるものと予想される。 現在癌的症状にある公害問題をまったく新 新しい道』 が世の指導的立場にある方に捧 国内の諸問題は急速に困難の度を このときにあたり 立 B 6 判 6判 110頁 В 142頁 ¥ 250 ¥ 250

長の本宅の胸像がある家だけ焼け残りま でおります。 した。祈りはきかれたと、 胸像を頼まれて作りましたが、その病院 また、N病院長さんの大理石の等身大 ひそかに喜ん

ょ。

佐々木さん、それが毎晩鳴かないのです。

それがどの患者さんも言うのです。

先生はあの蛙を一体どういう心境で

作られたのですか』

私は、その院長さんのお話に答えて

を与えよ、有難度う、 「それはね先生、、蛙よ、

幸福を与えて・・・ 蛙よ、人に幸福 匹の蛙が鳴いてねむれなかったが、昨夜

られたのでしょう。

は一匹も鳴かず安眠出来た』と言うので

さいとのことでした。 ても喜ばれ、御地蔵さんを是非作って下 ております。 たらす作品でありたいと、切に~~願っ と同時に何らかの形でその方に幸福をも お会いした際、 先般、その息子さん(長男で医師)に 色々お話申し上げたらと 最髙の芸術である

した。先生も絵を画かれるからすぐわか と言ってとても喜ばれ金一封を下さいま はたッと膝を打って、それでわかった、 と、となえて作った」と申しましたら、

川を渡ってるのを画きました。

て頂いた御蔭と、天人女史と自分のみた しい作品を生み出せると信じております。 まに深く御礼を申し上げました。 思い通りの量感と動きが出ました。 先日、畳大の大きい水牛に子供が乗り みたまを常に磨くことによって素晴ら・・・ ほんとに/\/\この道につながらせ

これも道につながった御蔭と思い、 頂いておりますー。 私の画に、時々、 毎日書道展審査員)に書を書いて 感謝に堪えません。 甫田鵄川先生(日展 御礼

会員、

〒65

〒65

申し上げます。



せて頂いております。 阪の羽曳野市にあります〝新しい道〟と云う所で、勉強さ、只今ご紹介頂きました、市野光鵬と申します。私は、大

▽新しい道の場△

二百人位宿泊して、修行に励んで居ります。お互は道友と男の方が主体で、四十、五十、六十、七十才の方が、毎日そこでは全国各地から、北は北海道、南は鹿児島まで、

の先生、大学教授等、各層の方々の集りです。

云って、お百姓さん、会社員、社長さん、市長さん、学校

元、宮様であらせられた、閑院純仁様も、月に二回乃至

は三回位お戻りになって、皆さんとご一緒に寝食を共にし

その目的とするところは、成人大学のように立派な人間、てご勉強なさって居られます。

てはならない』と―国を思う誠に燃えているのであります。日本の国を救わなくてはならない、立派な国に建直さなく本の現状を見て、『このまゝでは日本は危い、今こそ起って

有難い人間になる為の、自己修養は勿論のことですが、日

三日乃至五日間位、宿泊して、俺れは市長だ、社長さんだ

その為にお互立派な職業を持ちながら、新しい道の場に

大学の教授だ等の肩書をはずして、普段着になって、兄弟

同様に睦び合い和に輪になって、夜遅くまで勉強させて頂 き毎日午前一時頃まで語り合い、練り合って居ります。 い地上天国、みろくの世に通ずる道であることを悟り、二 「新しい道」を知り、この道こそ、病気、貧乏、争いのな

▽脳を知って人生観が変る△

私も長い間この道に通って、

うにどうしてよいか分らなくなってしまいました。民主主義、自由主義にゆり動かされて、根のない浮草のよ終戦と同時に教育勅語がなくなって、教育の指針を失いと思います。私はもとく〜学校の教師をしておりました。が、この道に通うようになった動機を、申し上げて見たいが、この道に通うようになった動機を、申し上げて見たい

を退職して或る宗教に入りました。当時いろんな批難はありそこで、魂の教育こそ教育の本道であると思って、学校うにどうしてよいか分らなくなってしまいました。

表側に心が能いている。更にその外側に肉体がある」「人間と云うものは一番根本に魂と云うものがある。そのましたけれども、その宗教では

人間教育の真髄はここにあると思って、学校を止めて宗

あることを知らされたのであった。

成る程、小学校も中学校も、大学もある、更に大学院も

信者を集めること、資金獲得にうき身をやつして、救いの今の時代を救うことは出来ない、大きな殿堂を造ったり、教に専念いたしましたものの、結局、宗教と云うものでは、

状に悩んでいた時、

根本から逸脱し、我が田を肥やすことに汲汲としている現

、済は神の座である。のご本を読んで、

これまで数千人の信者を教え導き、人さんから先生と呼です。

十余年間の信仰生活から、すっかり足を洗うことが出来爾

勉強させて頂いて居ります ばれ、一かどの先生になった気持で居りましたところ、新

て、その点には大いなる自信を持っていたつもりであった。これまで真理を探究し、真理の具現の為に精一杯努力ししい道にきてびっくりしました。

あった。 道によってこそ救われ切ることが出来ることを悟ったのでこの新しい道こそ根の理であり、絶対の理である。この裏の真理もある、枝葉、幹の理があれば、根の理もある。 〝真理〞と云っても、表の真理もあれば、その奥側には、 〝真理〞と云っても、表の真理もあれば、その奥側には、

- 59

だ、と云うことを教えて頂いて、眠りこけていたみたまは、脐は神の座である〟の言葉であった。人間の根は、脐、 開眼されたのであった。 転換をさせられたのであった。 によって、私のこれまでの人生観も世界観も、百八十度の **脳の在りかをはっきり教えられ、脳の能らきを知ること** られてしまってなくなった代りに、今度は口からお乳を、 も生え、心臓も肺も胃も腸も、必要ある器能は次々と出来 ら生み出されるのだろうか、この生命の根は、どこに存在 のむように成ったのである。 となるので、すべてが神秘である。 て、丸々と肥え太った赤ちゃんとして誕生して来た。その 際廭の緒は切られて、母胎からは立派に独立した赤ちゃん 栄養を吸収していた命の綱ともたのむ脐の緒は、 このように自らお乳を呑むように成ったその力はどこか

切りと

この神秘の扉を開いて下さった唯一の鍵となったものは

十月十日の間に胎内の真暗闇の内らで、眼も出来、手足

▽人間の根 (原点)は済である△

し、どのように能いているのだろうか。

腹の真中に、あぐらをかいて坐っている済は、胎内にあ

— 60

、脐、と云うと、一寸ユーモア的に感じますけれども、

それは表の見える脐である。 西洋人は ^ネーブル ~ と呼んでいる、それは中心とか、

親の胎内に根を生やした、それが脐の緒であった。その脐 ツン(核)である。その芥子粒のような小さなポツンが、母 た、一番もとである。 は、もと、の意であり、 統一するの意味であろう。 日本語の〝へそ〟は、へとは一番先に出来たもの〝そ〟 ^へそ は、精子と卵子とが結ばれて出来た、最初のポ *へそ*とは人間の一番先に出来

あろうか。

の緒から栄養を吸収してだん~~大きく育ってきた。

た、その坐すところを、脐下丹田と云われていた。

のである。

へそ〟が本当のへそである。

になっている。或る人が云うのに「かって大きな功をたてた る間に大切な役割を果していたが、最早無用の存在のよう

ので、その勲章をつけているのだ」と、果してそんなもので この内裏の脐を、日本人は昔から〝みたま〟と云ってい 実はこの脐の内裏に、目に見えない〝空〞なる〝へその 表の済は誰も知っていたが、奥側のへそは知らなかった

そも最初に、この見えない〝みたま〟が、ふとしたことか

たのである。父は天、母は地と云われるのもこの為である。 お父さんのみたまも又そのお父さんからで、父、父、父 お父さんの精子を通して母親の母体を温床として宿っ

玉のようにつながって、一番元のお父さん、究極は、天な る父に帰一するのである。

と遡って行くと、我々の祖先を通して、上、上、上と珠子

主神である。 この天なる父こそ、大自然の一切を創造り給うた、創造

> 腸も生成化育されたもので、心臓といえども自由に脈搏を に軌道を変えることは出来ないことを知る。 人間も同じように〝みたま〟によって、心臓も肺も胃も

ま〟太陽も月も地球も一切なって、その間には見えない糸 かくの如く大字宙の、創造主、と、 小宇宙の人間の ″ み た

変えることは出来ない。

のようなもので繋っているのである。 この見えない糸を゛たまの緒、とも云われ、その間には

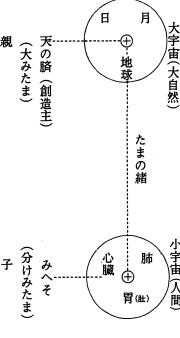
つく息が能らいているのである。

▽みたまの親を知る (理の親)△

給ったもので、分けみたまと云われるのである。 然し〝みたま〟は天の父、創造主神の元親から、分け授り て、今日の自分があることをしみじみと有難く思うのです。 こそは有難い親であり、父は天の働き、母は地の働きとし みたまが宿り、成ってきた道すがらを知るにつけ、両親

る。何時も一定の軌道の上を動いている。決して自由勝手 たものである。太陽と云へども創られたもので、自転して る。太陽も月も地球も一切合切、創造主神によって創られ いるけれども動かされている。月も然り、地球もそうであ 大自然を大宇宙と見れば、人間は小宇宙の如きものであ

元根



61

小宇宙

い思い上りであったことが分って、お詫びのお詫びである。 **〝艱難、汝を玉にする〟の諺にある 〟たま〟とはこのみた**

その ″つく息のこもと、こそ、 内裏にある〝みたま〟で

ある。 その容れものである。 この、みたま、こそ本当の自分であって、上皮の自分は

となることが出来るのである。 成長した暁には、絶対の価値を発揮し、有難いく~みたま ある。絶対なる天の親から分れた子であるが故に、立派に 我々は親と云っても、これまでは両親という、表の親し ^みたま^こそ、天なる親から見れば、天の*可愛子*で

か知らなかった、たとへ知ったとしても、両親の親である

祖父母を通して、先祖さんを知る程度であった。 上皮の自分であった。本分の自分は〝みたま〞そのもので の中にあって地上の立木を見ている〝根〞のことである。 のである。 て最も大切な〝みたまの親〞即ち元親を知ることが出来た ^みたま、の存在を知り、その能らきを知ることによっ という字は〝立木を見る〟と書いてある。成程土 俺れがく~と威張っていた自分は、実は創られた

あることが分って見ると、俺が~~の〝我〟はとんでもな

はならない。

うな美味しい白い乳にはならない。その裏に内裏にはお父

さんの血があってこそ、白い乳に成ってくることを忘れて

たい《こそ、価》であり、値であって、価値あるみたまのこ まのことであった。 上代の人は、自分のことを〝あたい〟と云った。その〝あ

とであった。この〝みたま〟を磨き切ったあかつきは、本 る筈です。 当に有難い自分となり、人さんからおがまれるようにもな これまでお互は本当の親を知らないまゝに、 勝手気儘な

ことは、知らなかったとは云え、天から見れば、大きな埃 振舞をして、親の思いに添わないことを、積み重ねて来た

であり、業となっているのである。

に過ぎなかったのではないでしょうか。 丁度お母さん~~の一方的な親孝行で、お父さんあって

んでいる。あの白い乳は、お母さんの血だけでは、あのよ の自分である、と云うことを忘れていたようなものである。 られる。けれどもそれは片手落ちの孝養で、 母親の乳房から出る乳を、日本では昔から『ちち』と呼 俺は親に孝養を尽くしてきた、と思っている人は沢山 表だけの孝養

▽人間の根であるみたまの育成 (みたま磨き)△

かと申しますと、 人間の根を太らせ、 立派に育てるには、どうしたらよい

にしてあげたら、根は太り、肥え、根の力は培々に成って することである。植物でも同じことで、根のよろこぶよう 第一に、根であるみたまさんに、喜こんでもらうように

それには、どんなことでも、よろこべる自分に成ること

である。

みたまは能き出すのである。 りだと、喜びによろこぶ。そして即座に心の持ち方を、百 八十度変えるならば、みたまは喜び、みたまは眼を開き、 今日只今、新しい道の話を聞いて、成程そうだ、その通

を頂くことによって、どんく、肥えて行くのである。 まさんは、天の理、天からの肥をよろこんで頂き、この理 田んぼの稲は、きれいな真清水をよろこぶように、みた

> 苦に直面すると、頭にきてしまう、たじろぐ、めそくくと うに、汝(みたま)をたま~~に、まん丸く肥え太らせる あると、悪くなったと思って医者よ薬よと云って大騒ぎす 泣く、甘い言葉でももらうと喜ぶ、病気になって苦痛でも には、艱難辛苦は有難い妙薬となるのである。 現代の人は、苦を逃げることのみ考へている。 一寸した

喜んで通ることである。艱難汝を玉にする、と云う諺のよ。。。。。。

こうした甘い在り方は、子供時代ならいざ知らず、成人 る。果ては神様に助けを求める。

の思い、行じ方がみたまさんの思い、即ち理に添っていなかった そのように成ってきた原因は、すべて自分にある。常日頃

からである。その責任は自分にあるのである。

ろ~~な病気の症状が起ってくる、怪我もする、家庭内に 衰えて縮んでしまうのである。その結果は上皮の関係にい 根であるみたまさんが喜ばないでは、根は陰になり痩せ

も忌しい事情が現れてくる。

って十になる、九十九を経て満々になる。万歳の声が湧き *九* は究極と云って数理から見ても峠である。 九を通

苦は逃げれば逃げる程、追いかけてくるものである。

揚る時には、大きな苦を通り了した結果である。

*九、は *苦、と通じ、節である。苦節の文字はよくこ

れを教えている。竹には節がある。あの節があってこそ、

、若い時に苦は買うてもせよ、と云われるように、 若い

分で刈り取るのは当然なことである。この時の苦痛こそ、 苦痛のたねは、もと~~自分が蒔いたのである以上、自 中に苦はしておくべきである。

理であり、みたまさんの思いである。 はならないお役とあらば、喜こんで果そう、これが男の一 くてはならない借金なら、よろこんで拂おう。果さなくて 越えなくてはならない山なら、喜こんで越えよう。払わな は磨かれ、浄められるのである。 身そぎの行として、有難く頂くことによって、みたまさん

大きな節はそんなに度々あるものではない。日本人は昔か まは磨かれるのである。 ことを教えている。それによって身の内は浄められ、みた ら節というものを有難く頂いてきた。その節を、伏し拝む 人生にはいろいろな節がある。節の度に苦はついて廻る。

″みたま磨き〟の秘決は、苦を苦としないで、よろこん

で通る。そして成ってきた姿を、

有難く頂くことである。

▽前生か今生の業ム

ど真ん中に座を占めて、本来の使命を現世で果そうとして いものから〝有〟なる肉体が形成されて、この肉体の内裏の ^みたま、 は姿も形もない ^空なるもの、 で、無に等し

ますが、本来の使命を果し了えたみたまさんは、喜こびに 空即是色、色即是空。の意味もよくご納得頂けると思い いるのである。

よろこんで、あの世に還って往く。 こうして人間は輪廻転生を繰返しているのである。

我々のみたまは、丁度〃らっきょう〞の皮のように、重

とか)が現在の自分となって生れ代っている。 なり合っている。その一番上皮の前生(六代前とか八代前 もとく、みたまは天から分れたもので、そも最初は、

して今日までの人生を、今生、と云うのである。 かって先祖として生れていた時を〝前生〟といい、

(頭脳智)が発達して、 禁断の木の実 病気の形で果させられるもの、交通事故で大怪我するもの 手がつけられなくなるもの、 道楽息子が出来て、先祖からの財産を使い果してどうにも 色々な形で見せられるのであ

る。

その後

人間の智恵

身の内に埋蔵されているのである。 これとは反対に前生々々に積んだ善行は、天徳となって、

ある。 りであって、我々はこの業を果すべく生れてきているので れてきた以上、何としても果さなくてはならない大きな借 は有ってはならないもの、 人間としてこの世に生

この前生の業は、

今日までどのような宗教に帰依して信

仰を続けても、 この汚れが原因になって、 果すことは不可能であった。

ている為である。 あんなよい人がどうしてあのような不運が続くのだろう 耳にすることがあるが、前生からの業を果させられ

が顕れてくるのである。

病気、

災難、

など忌しい事象

も異っている。 人はそれく 前生の業の果しもいろく~である。身上の 顔形が異っ ているように、人それぐ~の分

> すべく約束されているようにも思われる。 も充実した年頃であって、 その年代は丁度、精神的にも内体的にも成長し、 よく男は四十二才、 女は三十三才を厄年と云われるが、 前生からの大きな借 り(業)を果 経済的に

役を果すことにもなる。 このお役を果すことによって、みたま、 の汚れは浄めら

厄は約にも通じ、

前生からの約束事であって、

有難い

お

れるのである。

らの業を果す、人生の大きな節であると思われる。 思えばこの厄年と云うのは、悪い年廻りでなく、 これを前生からの約束であったことを悟り、 因縁ならば 前生か

を天にお任せして、変な気持を起さないで、喜びに切替え にお詫びして、耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで、

て行くならば、越え難いと思われる事情も、 り取るのは当然だ、有難く頂く気持になって、天なる親様 よろこんで果させて頂こう、自分の蒔いた種は、 症状の重い病 自分で刈

って下さるものである。

為に、迷える小羊のように、事ある毎に一喜一憂しておっ 今日まで、絶対であらせられる天なる親を知らなかった

り〝矛盾を越えて〟こられたのである。

た現世のご生活は並々ならぬご苦労であらせられ、文字通 清らかな心の持主であらせられただけに、この汚濁に満ち

ったのは、みたまの元親様である天が、地上に顕現されて 〝業〟は如何に神様に祈っても願っても、清算出来なか

たのである。

おらなかったからである。

国 おからだはもとく〜蒲柳の質で病気がちであらせられその た。従って、家庭を守る奥様としてのご苦労は大変であった。 龍馬先生を慕われて、若くして上京され、一にも国、二にも した。先生は高知の土佐の御出身だけに、維新の国士坂 勿論、ご夫君の松木天村先生もご立派なお方であられ 国の為には一身一家を顧みないで、日夜奔走して居られ

天なる親が地上に顕れ給う△

この創造主が地上に顕現されて、天からの放りもの、天の みたまの親こそ、人類の元親であり、 創造主神である。

る、天即人であって、肉体は地上にあって天の働きをなさ 彫りものとなられているお方こそ、松木草垣女史なのであ っている。天は松木草垣女史を、天人と命名されたのであ

すが、ごく平易に申上げるならば、おやかた様のみたまの る。我々は草垣女史のことを、おやかた様と申上げていま

本籍地は天上界の南に座を占められ、現住所として肉体を

おやかた様は生れながらに、

ご立派なみたまであらせられ

ご夫君を助けて、日本婦道を身をもって実践され、

べてをよろこびに切替えて、よき夫人としてよき妻として

が多かったのである。

そうした家庭生活の中にあっても、

上に経済的に恵まれず、日々のご生活にさへこと欠くこと

新しい道はおやかた様がお通りになって出来た道である。宮としてお肚の中にお在しますのである。 『天人』とは、天直々に令名されたのである。

今から二十年前、不思議なことが起った。それはおやか

た様の身の内のみたまさんから、天直々の妙音が、とう

よく困難に耐え、す

と湧き出るようになられたのである。

そ。妙° の。音°天 お。はのは、経文は、経文は、経文は、経文は、経文は、 |言葉は、生のまゝのご垂示となる。||つく息となっておやかた 様の お口の。。。ながなながなに、その妙音こそは絶! つ。 ういて出る。。。。

有難い天の肥(声)として汲みとり、みたまの糧として頂き 従って、 その妙音に接することによって、我々のみたまは

業は消滅してしまうのである。 みたまの業は洗い浄められ、何時果てるともなく、 に頂き、身を以って行じさせて頂くことによって、 我々の 宿年の

と も、 こうして業がなくなるにつれて、これ迄喜べなかったこ 何時の間にか喜べるようになり、病気と思って気に

て他人さんからも、随分あなたは変ったと言われるように かけていた苦痛もなくなり、陰であった性格も陽気になっ

なる。これ迄の人生観は、すっかり変って、自分でも不思

⅌

議に思うようになってくる。

新しい道を訪れて、最初ご明断を頂いた時、

次のような

天の 本 みたま

天理 横道

(表の理 (岡のべの こころ(関係)

天

地

合

体

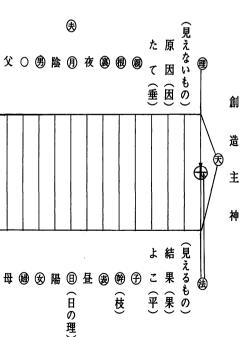
新 J

間 l.

完 61

成 道 の。に。様。

程。 程、外。か。な。自分。 か。な。自分。 か。な。。 内。や。分。、 か。つ。の。本。 ら。て。身。当。 無。く。の。の。 限。る。内。神。



ると、 分の思いが切替って、 身の内の根である、 自然とすべてがうまくゆき、 みたまの思いに添うようになってく みたまの業がなくなって、上皮の自 自由用の境地を味わし

て頂けるようになってくる。

見ると、如何にも甘いく~人生であったことを、つくぐ~反 省されると同時に、今日の自分を有難く思っている。 外に向っておかげを求めていた過去の自分を振り返って

持で一杯です。 この喜びを、 一人でも多くの方々に、お知らせしたい気

▽新しい道は本道である△

はない。 るみたまであり、目に見える上皮の自分は、本当の自分で 以上申上ましたように、本当の自分は、肚のどん奥にあ

ある。

今こそ、

根の理を知り、

本道に立還らなくては、

やがて

行詰りとなって、どう

行くに行けない、通るに通れない、

ご本尊こそ、有難い尊いみたまであった。 我々の肉体を宮とすれば、その奥に鎮座ましましている

分になって、南無の気持になって、よろこんで行じてゆく、 それが天に通ずる本道である。 このご本尊である、みたまの思いに添うよう、素直な自

く道を横道と云うのである、 て、知性にもとづき、心と云うものに依存して、歩いて行 根の存在を知らないで、頭脳こそ一番有難いものに思っ

> ある。彼岸を追い求めて行く、その果ては青い鳥物語が、 横道は、法の道と云って、 水平に彼岸を求めて行く道で

へそ通りであった頃の日本人が通られていた道で、 本道こそは、その昔神代の頃、既に敷かれていた道で、 天。そ 最 か。も も ら。創じ古

これを教えてくれる。

あえぎ、 今や、世の中は ごう (と業のる壺と化して泥の中に どうしてよいか分らなく、全く行き詰りの状態

ら命名されたもので、 人間智で付けたものではないことを

(東海地区委員長)

和

田

空前絶後、天人女史の出現を世間では二十世紀の奇蹟というだろうがそれは、天意による必然であ 時来りて「かみながらの国」日本に出現されたのである。人々よ、元を知って自然に選れ!

よって伝承されておるのであります。められ、人類の福祉に多大の貢献があったことは、史実に或る意味において、何れも其の時代(への最高指導者と崇ホメット、孔子、老子を称して、世界の五大聖人と仰がれ、今日まで、人類存続の歴史に於て、釈迦、キリスト、マ

性文明は、自然と人間とを、刻一刻と離してゆき、人間性昔の人間より真に賢くなったでしようか、徳操を忘れた智歩を遂げ、日常生活も今迄にない便利快適になりましたが、であります。学問も進み、科学は日増にめざましい発展進る教えをもってしても、どうにもならないのが現実の姿ところが、今や世界の現状は、右の教えは勿論、如何なところが、今や世界の現状は、右の教えは勿論、如何な

戦後何んで崩壊したか、具さに之を検討しますと、倫理、

そこで長年にわたり、美徳として、培われた倫理道徳が、

刻の度が濃くなりつゝあります。 刻の度が濃くなりつゝあります。 別の度が濃くなりつゝあります。現代の様相は、恐るべきその過程 でも、道徳の低下が叫ばれていますが、これに代るべきも 戦が至る処で、鎬をけづっております。又国内におきまし 満ち、一方に於ては経済の異状競争、思想的侵略等、政治 満ち、一方に於ては経済の異状競争、思想的侵略等、政治 でも、道徳の低下が叫ばれていますが、これに代るべきも でも、道徳の低下が叫ばれていますが、これに代るべきも でも、道徳の低下が叫ばれていますが、これに代るべきも でも、道徳の低下が叫ばれていますが、これに代るべきその過程 が正る処で、鎬をけづっております。又国内におきまし できる処で混頓 が正る処であります。現代の様相は、恐るべきその過程 ができるできるのであります。現代の様相は、恐るべきその過程

本来の人間性に立脚しておらないため、戦争中及戦後等 んか毛頭考えず、唯々利潤追求のみに終始した結果このよ

が出るか、最初から当然解っておりながら、近隣の迷惑な 場合、製造課程においてどんな瓦斯が出るか、どんな汚水 ます。つまり当時者が、事業を企画し、一工場を建設する その第一次原因(真因)は、人間の犯した業の現われであり

うな公害を惹起したのです。勿論公害は前々からあったの

の非常時には、たわいもなく、影をひそめたのであります。

らずで、人間が心によって人間を道徳という美名のもとに、

いろく〜規格を作って、之に当てはめたもので、常時即ち *衣食足って礼節を知る*という環境下には通用しても、

道徳は、智性から発した心の所作で、何々すべし、すべか

来せんとする時、救済の方法無しとするならば、一体ど た宗教、哲学、倫理が全く無力化し、遂に人類の破局を招 えば、崩壊したことも、当然と考えられましょう。 結局道徳も、心という曲者の仮面に過ぎなかったことを思 では今日までの心の支柱、人類の幸福の主役になってい それが発散する瓦斯によって、並木の松も黒く煤け、至る ですが、工場が少なかったので、余り問題とならなかった たので、忽ち大問題になったのであります。 のです。戦後特に工業が加速度的に発展し全国的に乱立し 次には今に日本中の道路を埋めつくさんとする自動車も、

簪告するが如くに感じられてなりません。 自動車も飛行機 も同様、解毒装置又は燃料の改良を早急に計るべきであり 処で枯死又は枯死寸前の姿を見て次は「人間の番」と恰も

公害による世界総汚染

本的解答は得られません。

面目に論じあってはいますが、単に方法論に捉われ何等抜 うなることでしょうか。世の識者はこの問題に関して真

る原因と云われております。然しこれからも新しい道式 飛行機、自動車から噴射する有害瓦斯等は、皆公害の最た 場から噴出する有毒瓦斯も、河川に排出する有毒汚水も、 公害は今や世界中の大問題の一つになっております。工

に申せば、それは第二次原因即ち誘因とも申すべきもので、

す。

これが極端に欠乏すれば、深刻な問題が遠からず起きるで 地球を取巻き、そして生物に酸素を供給してくれている。 トンや海藻によって生成、これが波の飛沫と共に放出され、 あろう。其他殺虫剤の公害も忽せにはできないのでありま 莫大です。その酸素も太古以来、草木並に海中のプランク ます。尚飛行機は常時、世界の空(滞空)に二万数百台が飛 んでいるそうです。この飛行機、自動車の酸素の消費量は - 70

厚生省では食品一つ〳〵に対して一定量の添加剤は許可し

ります。それが今日は、山は到る処で醜い地肌を表わし、 最も端的に表徴した言葉に、『山紫水明』という言葉があ の情緒とはあまりにも縁が遠くなってきたようです。 水はどす黒く、これも人間性の欠如を見せつけられ、日本 次に国土環境問題の一例ですが昔ながら日本の風景を、 ります。 唯売らんかな一点張りの悪徳業者に義 憤を感ずるものであ なって中害するのです。これも同様人間性の欠如からくる ていますが、食する方は混食、常食するので、添加剤が重

人間そのものが醸し出す公害、それは人間が吐く毒気であ 更に公害として未だ巷間では知られておりませんが、 な宣伝、日本は薬の王国、医薬万能の感があります。素人

ります。つまり怒り、怨み、悪口、妬み、憎しみ、呪等々

及び愚霊による邪念、邪気が大気中に発散し、著しく空気を

斯様に人間性を失った者が吐き出す毒気によって、天の にも拘らず、昨今春夏秋冬のけじめが乱れて来たようで、 ではありませんか、爾来日本は世界稀な四季の整った国柄 十二匹が死んだと米国の雑誌にありました。何と恐ろしい これを液化したものを、二十日鼠に注射したら、百匹中五 汚染するのです。人間が怒った時の息を袋につめこんで、

気も狂い、気象状態も変化激しく、仲々予測し難いのも人

間のなす業かも知れません。

噌、醬油はカビがはえたり、酒も腐敗しますが、今の製品 よって肝臓病、腎臓病患者が大変多くなりました。昔の味 タント食品が盛んになり、防腐剤、着色剤、漂白剤の害に 次には食品公害について申述べますと、最近益々インス

は防腐剤添加の為、その毒性によってカビがはえません。

来たし、それを余病と称し、亡くなった例が沢山あります。 **- 71 -** めに、全体(生命)を失ったり薬害のため別の器官障害を めて牛を殺す」の譬えの通り、対症療法即ち部分を治すた の薬乱用、医者の過剰投薬、強力の薬による障害「角をた

更に薬の公害も大いに危険で、マスコミによるオーバー

医学は向上、医薬は進歩、優秀設備を誇る病院がふえる許 入院したくも順番が来ないと入れないとは何たる皮肉何た りであるのに、患者は益々多くなり、どこの病院も超満員、

ち人間を廃人にする恐ろしい薬である。 る矛盾でしょうか。其他犯罪と関係がある麻薬の害毒は忽

最後に公害を二つ挙げて結びとすることにします。その

怪我は九十万名、その内再起不能者は数知れず、自動車を であります。何か人間的欠陥ある人が運転するとルールを 人は凶器と云っています。車は凶器ではない。文明の利器 一つが自動車です。昨年の統計では、死亡事故二万余名、

無視した結果が応々凶器となるのです。飛行機、自動車が

発明されてから健康と長命とは正比例しなくなりました。

悪さ、マスコミにのって現われているセックスの氾濫、 尚もう一つの公害が週間誌や映画や、そのポスターの醜

年を如何に毒するか何んと忌しい公害ではありませんか。 しかも家庭の茶の間にまで入りこんでしまい、これが青少 全く人間の形をしていても、良心(みたまから)のカケラ もない輩の仕業であります。

知性文化の終焉

現代を第二文化と呼ばれています。人間の智性によるも

飽くまで利害得失に終始し、結果の世界即ち枝葉末節に捉 われ、欲求に明暮れの果、斗争となり、益々人間本来性を 他主義となり、物(金)を価値の対象としておりますので、 から発する心が中心なるが故に、個人主義、利己主義、排 ので、物質文明又は科学文明とも云われております。頭脳

霊性文化の抬頭

ます。では霊性とは何か、それは観念的であり唯漠然とし 即ち霊性文明でなければ、人類は救われないと云っており とも受取れるのであります。いかに智性から霊性に移り変 て、何等解明されていません。洵に曖昧で、所謂精神文化 世の識者は、智性文化の行詰りを打開せんと、第三文化

っても、霊性なるものの本体を悟り得ずして、智性から脱

見える世界(有、結果の世界)を越えて、目に見えない世 しい道は〃かみながら〟そのもので天の理即ち天道を地に 皮することはできないでしょう。また霊性なるものが、宗 界(無、原因の世界)つまり世の元に思いを向ける必要が に出来ない。何れの宗教も天(神佛)を指向せるもので、新 ひく。それでこそ世が救われる唯一の道であります。 教的であったならば、これまた末法の世を救うことは絶対 新しい道、天人女史の在り方を知るには、一遍通り目に

- 72 -

宇宙自然の創造

あると思うのであります。

科学者の仮説によりますと、大宇宙間なんにも無い処に、

新たなるものの生れざる限り、このまゝでは人類の滅亡

して頭で心で作った虚構文明は、最早如何ともなし難く、

を避けることは不可能でありましょう。

ない浮草の如く、やがて枯れてゆく如くそれは自然を無視 逸脱し、前述の様な公害により、世界総汚染となり、根の

運動の結果、大きな火の玉となり、これが飛散して日月星 瓦斯らしきものが発生し、それが段々拡大し、猛烈な回転 れが霊性のへそ(みたま)であると教えられています。こ のみたまは天の分霊(わけみたま)であり、その本質は無

農が出来、宇宙初って以来五十六億七千万年を経て現代に

り、それは無であり空であり、最高次元の場でこれが発動 至っていると云われています。然らば宇宙の中心は天であ

のだそうです。ところがそのみたまは大なり、小なり業の 生死、運命の帰趨は、このみたまの動向によって決定する であり空であり、小さいながら全智であり全能で、

人間の

無いものはないと云われています。宗教方面からも、業と

人女史は業取女である申され、実際に理に添う者に対して いうものは無くならないものと断定されておりますが、天

して森羅万象を創成した元親(創造主神)であります。 天は絶対であり神秘そのもので、統一、普遍性を内在し、

無限であります。 天体の運行を見ても、一定の軌道を分秒の狂なく回転す

るが故に、摩擦なく衝突もなく、宇宙は秩序そのもので、

一例を挙げれば、月に打上げられた人工衛星も、地球や

着又は帰還できたのです。 月の規則正しい運行を基準にしたればこそ、確実に月に到

言のうち に人間に教えております。 天の意図は自然界全てに具現され、一大教典として、無

ます。そのみたまたる所在とその働きについては今まで且 の道では向上の過程に於てへそ・みたま・みのしろと云い 生を受ついで今生と共にあるのです。 世間では魂のことを霊魂とか魂魄とか云っているが、こ 人間は因縁の理によって、世々輪廻転生し、魂として前

間至上主義の末路であります。

たまに還って、始めて神秘になり、無限に上昇、誠の誠と

然の喜びと成り更にみたまは磨かれ、天の子として元のみ は業を取り、業が無くなることによって苦を苦としない自

なって、人助け、国助けという、この道の目当に向って、 精妙なる働きが可能となるのです。 信となり、長年の間天の理に反し、人間思案によって、現 しかるに人間は、とかく智恵が独走し、偏見、我執、過

が、地上界に於て一番不適者は人間であり、このまゝでは よって万物は生きられるのです。 又適者生存、不適者滅亡という、天地の法則があります

– 73 –

世のような末期症状を呈するに至ったのは、思い上った人

昔から「天に則るに如かず」と云われているが、

人類滅亡は必然であります。

は肉体の中心に位するへその 奥に高次 元の場がある。こ

って何人たりとも、確認したものはなかったのです。女史

天人女史の出現と新しい道

抑も大自然からの人間草垣女史としての修練は、筆舌に

のものの 存在であります。三千年の大昔から今日あるを、 然的であり、過去になく未来にない、所謂空前絶後神秘そ って、今の世に顕われるべくして現われたお方、それは必 ます。まさに世も終らんする瀬戸に、天のしいまわしによ ょう。だが奇蹟なるものは、偶然的なる要素を含んでおり 天人女史の出現を、世間では二十世紀の奇蹟と云うでし

なって「かみながらの国」日本に出現したのです。 予言せし者が二、三あったが、時来たり今や決定的事実と ご垂示に「やかたの過去、これが天からの見せびらかし、 実に世界人類の光であり、瑞兆であります。

こもと)は地の紫の座である天人女史の身の内にあり、二 つ一つ、天に有り、地に有り、天地一貫玄妙そのものであ れを具体的に申せば、(みたま)は天の南の座にあり (息の 世を救うため、人間として下生されたお方で、人間として そういうふうに決めてある。これが世の元そのものが前生 です」とあります。 (天地合体)せる叡智者松木草垣女史であられます。尚そ 切の修行を積まれ、そして天(理)と人(法)と完全統合帰 天人女史を卒直に申せば、元々が天(創造主神)であり、

この女史によってみたまは磨き開かれ、無限上昇し、天と

は世の一大転機に当り、天命を降し天人を給うたことで、 最も新しい存在であります。我等は天に感謝する、それ それは天の能(はたらく)新しい道の場であります。

新しい道は、凡ゆる歴史の年輪を超越し、最も古くして

そこは地上において唯一絶対の天の場が大阪の聖地に、

二応、三応に四応の厳しいお行によって、最高に上昇、遂 身につけられ、そのたんびく~に向上、過去の人生は一応、 との連続にもめげず、次々の苦を一つく~喜びに替えつ^、 苦の最悪条件の渦中にありながらそしてありとあらゆるこ に人間完成、生きながら天に帰って、再び生れ代った不思 少の頃より長年にわたり、精神苦、肉体苦、物質苦等三重 とは申せ、到底常人の耐えられる事ではありません。幼 ては表現できない、それは余りにも苛酷にて、如何に試練

りを励み、この道のご用に立つべく。これからの指導者を 仕込みを頂いております。そして女史を雛形として自分作 譲なお方であります。そして女史が人間として、通り切ら 育成されております。 て、紫の間のご垂示、松の間のお言葉として、道の者はお れた、果し切られた道を、それを天の理(教えの理)とし

感応同交、人助け世の立替の道が、有史以来始めて展開さ

れたのであります。 日本は由来かみながらであって、新しい道は、

それを

もので「この道の理は、かみながらで神代にかえる。今は 今の世に、新しい見方・取り方・考え方によって再現した

やかただけじゃ」と三年前に仰せられています。 ジャパンタイムスにアーノルド、トインピーが「この現

代の把握し得ない超急速度をもって、 めまぐるしく 発展し 独り日本のかみながらの道あるのみ」と喝破したのです。 つつある、人類絶滅の過程より、人類を救い出す無上道は、

日本の本質であり、清く明るく常に偉大なる始であり、絶 日本の大古、神代のかみながらは、天の叡智なるが故に、 正に天声人語でありましょう。

の生命の主流を貫く天の理であり、人間が原点(人間本 題で危険が迫っておりますが、天人女史ある限り必ず世 対だから終りがないのです。従って日本は現代種々なる問 にかみながら、それは宇宙の元始から、人間進化に向って の立替は絶対可能であるが、唯時の問題であります。更

来性に復元し、来るべき宇宙時代を創造すべく全力を挙げ ている処であります。 新しい道は、今までの社会を変えるのではない。 (湘南道場主事) 人間本 来性)に還ってのみ解決されるのです。

矛盾を超えて	苦難の中に光あり	天 の間ご垂示抄=	教 の 泉
版 写真版 二、五〇〇円版 写真版 二、六 頁	上製 紙 価 一、三〇〇円	上製 頻 価 一、000円	上製 A 5 判 四 五 O 頁

掛 講 演会 (三月十一 日 0 記録から

ひとのひとたるゆえんを知

ットか、本がありましたら見せて下さいと申 を申し上げます。 ております末竹肥料店の店主でございます。 大阪にありますが如何ですか?」 場の技師から、 昭和四十四年の秋でございました。 していただきました体験を発表させていただきます。 42 まし ますが、只今から短い時間ではございますが、 と話しかけられまして、私は新興宗教か何 私が、、新しい道、にご縁を得ました動機というもの この中には、私をお見知りの方が多数い 本日はお忙がしい中を大勢の方がこうしてお出 私 は只今ご紹介を戴きました西 無下に断ることも出来ませんので、 有難く高 「末竹さん貴方『新しい道』という道の 所からでございますが、心から 郷 突然、 の石畑 らっ 浜名湖水産試 で肥料屋をやっ 何 かだな、 しやると思

は

私の通

掛け

たと思はしてもらいました。 に求めようとして、 12 していただいたのであります。 ました。それを読ましていただきます中に、 それでその本を家に持ち帰りまして、 すると『生かされて生きる』という本を一冊貸して下さ 求め得られなかった道が、 早速むさぼり読 しました。 自分が今迄 か ンフ

東

海

末

竹

直

場

ます。そしてその年の九月十一日に、大阪につれて行って お方にお逢いさして戴きたいと云う気持になったのであり 結果、是が非でも、大阪に一回行って、天人女史という ので、この中にもご迷惑をお掛けした方がいらっしやるか 方も色々な目で見られたことと思います。 それは私が過去において、相当出鱈目な男でありました

戴くことであります。 新しい道では御明断と申しまして、天人女史に御面接を

もらいました

それは机一つを間にはさんで、天人女史の前に座ります 自分の過去、現在、未来を言って下さいます。

根があるのですよ。肉体と心は枝葉と同じなんですよ、根 そのお言葉の中に『木には根があるでしょう。人間にも

が枯れたら枝葉も枯れるでしょう。誰でも人間は身の内に

根があることを忘れているんですよ。 それで、あなたも人間に根があることを今から教えてあ

って、ご自分の根を先に磨かないといけませんよ』という げねばいけませんよ。それにはご自分に根があることを知

風に教えて戴いたのであります。

成程そうだなあと思いました。

験を通して、世の中の一人でも多くの方々にお知らせした ました。そして、それが唯自分の為だけでなく、自分の体 い、こういう気持が湧いたのであります。 初めの中は、家族の者も反対でございました。又罰囲の それ以来私は自分の根を一つ磨こうという 決意を致し

> 世の中のお役にたつ人間になりたいという一心で目下修業 今後はその様なことのない様に、本当に自分を磨いて、

も知れませんが、その点もこの席をお借り致しまして深く

お詫び致します。

をさせて戴いておるのでございます。

ら、誰に磨いてもらうことも出来ません。自分自身がその 自分の根というものは、自分の身の内にあるものですか

の間には二、三の個人病院にも通ったことがあります。 と肝臓が悪くて市民病院に通っていたのであります。又そ 気になって磨くより他ありません。 そこで気付きました事は、私は当時、一年半も、

話しも出来ないと思い治療に専念致しておりました。 当時、私は六十才でありましたが、今日迄の六十年間 或る日、私はこんな風に思ったのです。

そして何とか早く自分の病気を治さなければ、人さんに

らず、その最高の運転手がいらっしやることを知らず、も 自分の身の内にあったのだと思いました。それにもかかわ っと腕の良い運転手はないか、もっと親切な運転手はいな 夜となく昼となく、私を育てて下さった、肉体の運転手は

早速自分のおへその上に手を当てましてこう申しました。 いか、と他に運転手を探し求めていたのと同じだ、と。 まことに申し訳ないことを致しました、と気付きまして、 名近くの方を大阪にご案内させていただきました。

みたまさんにお委せ致します。その証拠に医者も薬も、一 らっしやいます。今日限り他を頼りに致しません。一切を 『誠に申し訳ございませんでした。先祖さんもここにい

切利用致しません。どうぞお許し下さい。お詫び申し上げ ます』と声を出してお詫びし、その日から一切をお委せ致

先端を受持たしていただいているのですから当然だと思い は臍緒によって、親々々々と先祖につながっており、その ました。これを血統というのだと思います。

先祖さんが、おへそにいらっしやると云うことは、我々

すから、何も気にすることはありません。 そして一ヶ月経ち、二ヶ月経ちしておる間に、何時の間 こうして一切を、根であるみたまさんにお委せしたので

少悪かったのですが、それも感じなくなり、指圧も毎月二 ずに済む様になりました。 にか病気は治っていることに気付きました。胃の具合も多 回は必ずと云ってよい程行っておりましたが、それも行か そこで、これは有難いことだと喜び、段々私の友人、知

人と訪ねて、この道の話しを聞いていただきまして、三十

日常生活の中でなさっていらっしやいます。 励みに励んで、ご自分の根、即ちみたま磨きのご修業を、 そしてその方々も今では、非常に喜んでいただきまして、

男は天 女は地

みたまは左 こころは右。。。

云うことであります。 ましたことは、つまり親があったから現在の自分があると この様にして私は色々な体験をさせて戴きまして、分り

るわけであります。私が現在あると云うことは、 があったからであります。どなたも皆そうであります。 すると親にも親があり、その親にも親があり、親々々々

親と申しましても、肉体の親があり、みたまにも親があ

とずうっと続いているのが、先祖さんであります。

ということを、「天人女史」によって初めて分らして戴いた かったのであります。それが先祖さんの大元は、天である その先祖さんの大元がどこかということが今迄は分らな

々のみたまは天の分れなんでございます。その証拠には我 わけであります。 でありますから、先程来お話しがございました様に、我

々は常日頃そういう言葉を使っております。

天とは何処なのかということになります。この広い天の何 運を天に任すと申します。その運を天に任すという、その それは頭で考えてどうしてよいか分らなくなりますと、 自分にはならない、これがこの道の教えでございます。 その教とは、人間本来斯くあるべしと「天人女史」のお

に、天から分けてもらっている、みたまさんのことであり それは、その広い天の方ではありません。自分自身の内 処に任すのかということであります。

ない。天の分れであるみたまがこの肉体を創って下さった 智以上である腹能智の方に任すということなのであります。 頭は、みたまさんの方から見ると、子であります。頭脳 要するに、人間は頭が先に出来て、肉体を作ったのでは

るのであります。これがはっきり分ることによって「新し のであるから、みたまが天、あたまは地、ということにな

い道」の筋道が分り、自然の法則が分るのであります。

ある最も貴いもの即ち生命の根元であるみたまさんの存在 吸をさし、血液を循環さし、食物を消化して、血や筋肉細 を認め、それに従って自分が立派にならなかったら本当の 拝んだり、他にお蔭を求めたりするんではない、身の内に とが分るのであります。 胞を創って下さっている主が、自分の意識とは別にあるこ その主が、自分のみたまさんであります。だから、他を 我々が夜熟睡して頭も心も休んで、意識の無い時に、呼

> を戴くわけであります。 生の音(おん)や、お言葉で細々とお仕込みやら、お示し筆 我々は、その教を基に致しまして日常生活の中で実行し

通りになられましたことを理として、天人女史のお口から、

修業と申すのであります。 この道から外れない様に行動することであります。これを で、この道は大昔からある人間の通るべき道であります、

て開明されたのであります。 が磐根錯節の道をお通りになられましたことにより、始め それを人類は今迄知らなかったのでありますが、「天人女史」

している。 ですが、それを知らない為に道から外れて、病気や怪我を ですから、この道のきめを知り、その通り踏み行えば、

表させていただき、実証しているわけでございます。 それを、私は体験さして戴きましたので、皆様の前で発 り、正常に戻るのは当然であります。

もその原因の世界を知って、その原因を正せば、病気は治 病気も怪我もないのが当然であり、又病気になっている人 人間誰でもが、この道を踏み外さんように歩けばよいの この道では、人間の肉体の左半身が天(みたまの方)、

右半身が地(心の方)、と教えられています。

すると、この「ま」即ち間隙を「よがさす」と申します、

(心、子、従、女)が、合さった状態が最もよい姿なんで そこで今私は、それを形で、みたまと心の関係を申さし それで、人間は誰でも左(みたま、親、主、男)と、右 間として、あるまじき行動が起って来る様になったのだと、 私は思っております。 それが、病気となり、怪我となって表はれて来ますし、人

ことは出来ません。 あり、主であり、基本であり、中心でありますから動かす 右手の方は、心であり、子であり、従でありますから自

ていただきますと、この左手の方は、みたまであり、親で

あります。

由であります。 ですから現代の世の中は、この自由に使える右手の方ば

も自由(\(\と全てが自分主体な考え方でありますが為 かりを使っているのと同じであります、その証拠に、何で

たのであります。それは、その方が楽なことは決っていま に、俺が~~、私が~~、と右に右に傾いた姿になって来 然し、その結果、 世の中に色々な問題が生じて来ている

から始まったのでありますが、右の方にのみ主力を傾けま のであります。 先程申しました様に、人間は元々左と右は合さった状態

こに間が出来るのであります。

すので、左手と段々離れて来たのであります、すると、そ

であります。

私も、自分の体験を通して、本当に有難い道であると、

視して、結果の世界(地即法、物、金)にのみ頭を使って この様に、現代の世の中は、原因の世界(天即理)を無

女史は、お歎きであります。 いる為に、頭でっかちの肚なし人間が多くなったと、天人 これでは世の中が狂って来るのは当然であります。です

の「新しい道」をお造りになられたのであります。 ですから、この道は、宗教でも、哲学でも、科学でも、

主義主張でもありません。

日本の国を、真に立派な国にするべき日本の道であります。 日々踏み行って病気も怪我もない人間社会を作り、そして 我々道の者は、この教をいただいて、自分が体験し、他

人の体験を生かして、日々の修業をさして戴いている現在 人間一人~~がこの道を知り、それを日常生活の中で、 姿に戻さなければ、人類は救はれないと、天は、天人女史

から、この道によって、元々の姿、即ち左と右が合さった

を創ってもらい、体温を創ってもらい、新陳代謝をして戴く、みたまさんのお世話になって、息をさして貰い、血肉みたまさんによってこの肉体が出来、今も夜となく昼となますと、今迄申し上げました様に、人間は天の分れであるこの道にご縁を得ましたことを心から感謝致しております。

親にさんげするのであります。有難うございましたとお礼を云って、自分~~の身の内の人難うございましたとお礼を云って、自分~~の身の内のし訳ありませんでしたとお詫びをし、嬉しかったことは、申の方で、今迄を思い起して、悪るかったと思うことは、申いているのですから、その主であるみだまさんに対し、心

とになるのであります。これは、自分でやらねばどうにもして、今迄知らず~~に積んで来た汚れや埃を掃除するこそれをこの道では、根を洗うとも、根を晒すとも申しま

なりません

その方法としては、先程、天村先生の申されました、夜

体験発表を終らせて戴きます。

た様なざんげをするのであります。おへそとお乳の間に、左手下、右手上と重ねて、前に申しおへそとお乳の間に、左手下、右手上と重ね、女の人は、手下、左手上と、おへその上に手を当てて重ね、女の人は右十時から十二時迄の間に南を向いて正座して、男の人は右

ますが、何か変化あると申されるのであります。 これを毎晩忘れぬ様に続けていると、人によって異なり

考になれば幸せだと思っております。日はその一端を述べさせて戴きました。これが皆様のご参して戴いたのでありますが、時間もございませんので、今私もまた、この三ヶ年半の間には、数々の神秘を体験さ

在を知っていらっしやる方も大勢いらっしやいますので、験した事実でございまして、この会場には、私の過去、B

下手な話し方で申訳ありませんでしたが、これは私の体

すが、又機を見て、各地方~~で本日皆様をご案内下さい本日の講演だけでは、なか~~お分り難いことと思いま

これから先の嘘はございません。

とりとめのない話しでございましたが、これを以て私のいと思います。「動き、日常生活の中で、一つづつでも実行して見て戴きたました道友と膝を交えて、色々と納得のゆく迄語り合ってすか」及機を見て「名地方(くて本日皆様をご案内下さい

ST. MINING

お茶どころ菊川町 における講演会報

東海支部西部地区

JII

話され 町

た。

だく ろうと 菊

だか ため

ら、

この道

を知

道

本年度から浮世

西

部

地 長

X

総

Ш

٤

賛

成

3

ま

を吹

道提唱大講



講演される松木天村先生

員 ならない でおろした。 かい なるまでは となり 末竹氏 終る頃には

人とい

うの

は

あてに

わからない

b

だと

とは

わって小春日和を思わ

会場までお

よい

よ講演

会の日

にです。

昨

道

友

同 ぼ

と胸をな

の司

会ではじま

n,

ほ

大会議室も満 ほっ

友の榊原美作氏 とは考えてもみませんでした。 感ずる。 百名を越すことが 元大和証券社長、 が菊川町の出身で でも始めての できる 道 講

ぞれ

0 な か

持場を和気あ

あ 私達はそ

をもって行うことが

できたと思

よう

晴

天に恵まれ、

っていた L 生をお 0 月二十八日 迎 えして、 (日) 苑主

に講演会を各組ごとにや から始まるとは思っても まさか道友三名 の理で 控室に にもひきしまっ 番だとい ただこうと身のひきしまる思 んなりと道 分達はこうしては 見えになられ 十一才にもなられる苑主先生が 議室で行われることになった。 お見えになり、 う空気が、 のお手伝いをさして ると聞 た緊張感がみなぎ いら いて、 なごやかな内 n よい よ本 いが

川町からと言

ってしま

すかさず末竹氏が

たので、

い順序

菊川 町農協大会 天村先 自 お なところ n ば申 です 42 日 道 L 頃 わけ こへの招 今度は本当に

いと思い

身近

通

待

たもも

ってまわ 整理

入場

ってい して、 したりして、 道 友の富原さんと何度も打 ただこうと、 人でも多く お 五い の持味を生 念を入 を 知

れて、 らとお く思いまし て、 なりま 岡方面より応援に 本当に心 廻った先で道の方がお見えに したよと言 願いした。 会場でお待ちしています 心強くも 掛 b かけつけ またあ n JII る をは 0 を聞 じめ ŋ て下さ が

午後 前

まれ な た方も ŋ た徳を慕って、 相当数 原氏 が当 ありま 地 L お 12 た 見えに 前々より なっ 積

て立

か

か

b

ない

根、 E

即ち大和

魂

を磨

顔をもっ

て解りや

すく話され

た。

n,

表 してく

n ることに

えない

香

ŋ

も、

学

0

量

12

あ 福 日本人になるという事は目に見 れた美事な松の盆栽を指さしな いさつをされた。 々し 海地区委員長 1 根について話された。『本当 笑顔 を浮べな 演 市 壇の から 野光鵬 横に置 開 会の 氏 れ、

-同の記念写真 会場前で道友

ので、

続いて

は れた。 魚が水中で泳ぐように、 題して、 っているが 「人間 『田中総理は日本列島改造論で云 湧き出 長旅の疲れのご様子もなく、 0 敵は、 苑主 づるままに話された。 なっ 天村先生が講演さ 正しく人間 てきた結果の世 悠々とさ だ ٤

る しなか ふれて ういう情 b 生 公害、 Ø をし 決され 原因につ る 0 いない。 白以: 人間 たら、 勢になっ た 過密過疎がどうしてそ ない。 後 から公害 の敵は正 あ 12 は 原因の世界を矯正 ては一ページも てきたか、 b 霊 性 自 ゆる事はなに 文明 しく人間で が生じた。 然に逆行 0 その 時代 す

熱演であった。

日 てきた民族 本人は本来 立派な日本人になるとい これ が ・それを又 最も 優 に n 主 た持味 体性 肚 を

0

た

動

機に

0

話され

魂

0 が

なっ

た夫婦

ともども

0 が

0

らと言って、

新

道

につな

天

人女史、

苑

主

先生

お

通

ŋ

あること。

|派にすることである。| 終始笑 \$ 10 0 ことで うこと て、どういう働きをしているかに は 何 は かということ、 あ るとし 魂 に主体性をお どこにあ というも < ことを少しでも多くしてい 知って と念ずるの た人生、 を 受け 世 てい のため、 せ る。 めて魂の が新し そして私 人の い道 ために尽 に 0 0

もの

3

n

その 三十 つまっ うと真剣な眼差であった。 きもあまりなく、 もなく、 なしに、ずっと立ちっ いて詳しく説明され 来場者は、 間コッ 分にわたる長講演でしたが、 ているのにも関らず、 椅子と椅子の プに手をふれることも 誰 一人私語すること 本当の事を知ろ 間隔が ぱなしでの 一時間 身動 相 当 を 生 いてみて本当に解る道 そうじ 事 0 か 市 0 ならとっかに た動機である。 やり け 野委員長の閉会をもっ やあなくて、 かえです。』と結ば

誰

かが 新し

言ってい

3

である。

人

道は歩

聞

て解る様

つな き度

かい

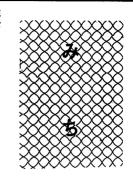
13

苦を喜んでやるのが みわたった事でしょう。 を受けた様子であり、 『真打の天村先生が先にやられた 次にやる私は話しにく 榊原美作氏の体験発 来場者は深い感銘 この道だ 魂に深くし 41 表。 か が 友一 にこの 烈々たるものを感じるのであった。 とは思えない その後姿はとても八十才を過ぎた を申し上げ、 撮り記念とし 会は大いなる成果と今後 同 日 つつ幕を閉じ 天村先生を中心に写 0 ため た。 若さと、 玄関でお送 に励ましあ 天村先 た。 玉 りし 生にお ともども を憂える 0 0 た道 期 真 待

て講

演

n



たのでよろこんでくれました。 のだそうです。それが元気で帰宅しまし かに無事つとめられるかと心配していた

爾来、先輩知人に挨拶に参上、三ケ月

沢

みんな感心して聞いてくれました。しか 間のお行の様子や、理を吹いて来ました。

寸苦心しました。当地の農家の人々は経 し場のお行の時と、浮世とは様子がちが いますので、しばらくは身心の調整に

この頃急に寒くなりました。今朝は霰

が降ったりして、ことに寒さが身にしみ 御地もお寒いのではないかと存じます。 この経済的変調が世直りの前兆とは受け 済的な危機感を漠然と感じてはいますが、 今までの高度成長の夢が捨て去り難く、

もなくすごされたことはありがたいこと 小生三ケ月下座お行中はひどい寒いとき 人は国家的危機を感じてはいますが、そ 取り得ないようです。もっとも二、三の 地変がおこらぬ限り、一般人は相変らず のような人は稀れです。なんらかの天変

き、おかげさまで無事修了させていたゞ 配慮により、皆様から大事にしていたゞ 惰眠の中にあります。 昨日、浜松の市野晴久さんのところ

殊にお行中はおやかたさまの特別のご

中の私でしたので、家族のものは、ひそ のみんなによろこんでもらいました。病 す。二日の日に久しぶりに帰宅し、家族 きました。厚く感謝いたしている次第で 天村先生も御出講下さるので、その驥尾 をせよとの話でした。もちろんこの日は 市における新しい道の講演会に体験発表 に行きましたら、来る二月十一日の掛川

ります。

に附して何らかの話をしたいと思ってお

寒さに弱い小生は、早くこの寒さが去っ いことです。若い頃から暑さには強いが、 今日は朝から、雪もよいの雲が出て寒

います。 て、暖い春が来てくれるとよいと願って 当地は梅の花が只今盛りで、近づくと

なだろうかと案じております。 いろく〜雑事を長々と書いてしまいまし

よい香りがします。場の梅は今年はどん

た。 下座中の御礼を申し述べるつもりでし

いました。 ではまことにいろくくありがとうござ たのに、申しわけありません。

おやかたさま、苑主先生、 寒い折から

御自愛のほど祈り上げます。

おやかたさま

二月七日

西沢嘉朗拝 敬具

◎家内よりも、よろしくと申しております。

衛年後征

てみました。 ◇ "日本"に就いて焦点を合せ

みました。 天の理 (8頁) もそれを集めて

天村先生みづから、 フィクに於いて、杯、を手わたさ 写真は去る3月18日上京された ホテル・パシ

に天村杯が授与されました。

れました。

落合直文先生作

草垣写

親の祈りが感じとれる。

心痛むことであります。茲に謹ん の稿が絶筆となってしまいました。 ておりましたのに、はからずもこ

で哀悼の意を表します。

大会に於いて優勝した塚原和也

"天村杯"授与。(写真参照

一回東京青年部のボーリング

そして、 きになった花菖蒲になりました。 ました。 ご明断室の床の掛軸も変りまし 天人女史が昭和十四年におか 輪の花菖蒲に落合直文先生の (表紙うら参照)

歌を讃として写されてあります。 歌は次のようなものであります。

ひをとしの 太刀はきて 見はやとそおもふ よろひをつけて 山さくら花

去る三月二十日午后十一時二十分 さっている東海の西澤嘉朗氏が、

0

"日本の情』(37頁)執筆下さ

永眠されました。

氏にはたびく、玉稿をいただい

であります ひきしまったものを感じさせる歌 緋縅の鎧を着けて 気魄というか、 見ばやとぞ思う 山桜花 決意というか、 太刀佩きて

◇白梅が咲いて、散りました。 桜が万朶と咲いて、 散り に

ないたくないものである。 何かを感じさせる花である。 緋縅の鎧をつけるこころを失し 桜は桜でも、特に山桜は日本人

受けとったらいいのだろうかー ていることの意味を、どのように ◇この歌が、花菖蒲の絵に書れ

をつけ、太刀を佩かせて眺めてみ 受けとりかたもあるように思える。 句と関連して受けとれば、又別の 種ではあるが、 たいという親の心が感じられる。 育って来た跡継ぎに、緋縅の鎧 鯉の幟をたて、 菖蒲は五月。菖蒲と花菖蒲 この歌を端午の節 武者人形を飾る は

もある。 初陣の天晴れ武者振りを、 あたらしい道」の親の願いで

早く見せることが最大の親孝行と

号の お は 5 16 0 か 日ごとに色艶を増しておりま たさまの句であります。 頁 頁に書いてあります 0 池 に "ちぬの ては が入りました。 海---"あさ』第十 の句は 木 な

る

でも悲感することはないと思いくそたび かきにごしてもます。この日本の国は

これぞ

みくにの

すがたなるらん

れ鯛もあまりかんばしくなくなっ

◇ちぬ

の海も今は公害で汚染さ

おります。 日本の国に "あたらしい道" があります。 日本の国に "あたらしい道" があります。

作の吹ごかは示しましたが、

20号

600

す。 (K生) 本誌(51頁)にその体験談をの 本誌(51頁)にその体験談をの 後絵も描いておられます。絵がむいているといわれ

氏はもともと彫刻作家でありま

の食堂に掲げてあります。

天人女史からご明断の

そ折

所

あさ第6巻第

山氏が画いた駿河凧であります。◇上の写真は鎌倉在住の佐々木

昭和48年5月1日印刷 頒 価 200円 昭和48年5月8日発行 送 料 45円 矢 野 誠 一

小 野 佳

宗教法人 神光苑・新しい道センター

☎ 0722 (33) 5785 (代)

A 10

発

編集人

新しい道

神の観念と人間概念を是正し、 宗教の前進と科学の再生を促す、 最も古くして最も新しい日本の 道の展開である。

1. 新しい道とは----

科学の恐怖、宗教の無力を憶う矛盾に満ちた世代を乗りこえて、 真実に生きぬく人々に力を与え、 主義 (イデオロギー)を超え一 宗教・科学・生命の神秘が一つのゴールに達する、 *かむながら、 日本の道の新しい復元である。

2. 新しい道とは----

人間の運命を支配する *みたま、(霊性)を磨き、業因を果し、天 (無限者) につながり、もって万人あこがれの幸福と平和をもたら す *義の国日本の道、の開顕である。

3. 新しい道とは----

教義宗教・殿堂宗教の形骸を離脱し、〝かむながらの道〟の真髄にたち還ると共に、倫理・道徳の繋縛から開放され、日本民族の道統を現代に新しく甦らしめる、大和の道の展開である。

4. 新しい道とは----

二十世紀における物質科学主義が侵した人類の錯覚を是正し、科学の再生と宗教の前進を促すと共に、人間が霊性的高度の飛躍を遂げ、人類総調和を目ざす天の道である。

5. 新しい道とは----

近代文明の危機に会し、天地(理・法)の大生命を把握する、人間完成に達した、叡智者天人まつき・そうえん女史の指向する *天の経倫、に則る、人づくり、家づくり、国づくりに進む天意現成の道である。

<mark>*</mark>***********************



わが家の基本財産づくりに一

ゆたかな家庭づくりの第 I 歩は、 高利回りの〈東洋の貸付信託〉で…。 元金がグングンふえて5年で約1.4倍、 10年で約2倍にもなります。

5年もの――年7.12%

2年もの 年6.45%

(予想配当率)

東洋の貸付信託

●1口1万円から●元金保証●無税あつかいもできます●郵便局からも申込めます

◆東洋信託銀行 本店 東京都中央区日本橋通1の9の1 東洋信託銀行 支店 全国主要都市38ヵ店